遊戯王５Ｄ’ｓ　転生者です、ごきげんよう

クアンタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王５Ｄ，ｓ　転生者です、ごきげんよう

【Ｎコード】
Ｎ９４７８Ｘ

【作者名】
クアンタ

【あらすじ】
テンプレによって遊戯王５Ｄ，ｓの世界に転生することになった瀬川遊奈。彼女は大好きな遊戯王の世界で、新たに得たデッキとともに波乱の人生を送る。
彼女が駆け抜ける先には何があるのか。
それはまだ誰にも分からない。

※この作品は転生オリ主、オリカ、原作再構成ものです。苦手な方はブラウザバックしてください。

そして作者のクアンタはあらすじ詐欺を多用します。
次回予告詐欺の常習犯でもあるので、ご注意ください。

プロローグ（前書き）

はい悪びれもせず連載があるのにまたやりました。
クアンタです、ごきげんよう。

あらすじを見ていただいたら分かるとおり、本作は遊戯王５Ｄ，ｓの二次創作であり、かつ私ＴＵＥＥＥＥを目指した作品です。

そこのあたりをご理解していただいて上で言います。

ゆっくりしていってね！

プロローグ

ふと気がつけば、そこは真っ白な空間だった。

いやいやねーよ。

ついこんな考えに至った私は悪くはないはずだ。
それもそうだろう。
たとえ理解力がある人でも、いきなりこんなところに連れてこられて何がどうなったかなんて分かるはずがない。
・・・・・いや別にナニじゃないけども。
さて、現実逃避はやめて目の前のリアルを直視しますか。

「そろそろ頭上げてもらえます？」

「いやしかし、これは私の過失であるからして、誠意を見せねばなりませんのでご理解下さい」

ああ、つまりはきちんと謝ってんだから許してよ、ということなのだろう。
私としても堕落しきったフリーター生活を終えられるなら、こんな形であっても構わないんだけどもね。

というかこの状況はあれだろう。
生前（この表現がしっくり来た）によく読んでいた二次小説にはよくあった展開だ。
つまりテンプレだ。

まさかリアルで遭遇するとは、思いもしなかった。
現実逃避したつもりがまさか真実を見ていたとは、私もなかなかやるわね。

さて自己紹介といきましょうか。
私の名前は瀬川遊奈（せがわ ゆうな）。
遊戯王が好きなただのフリーターよ。
アニメは見てないのだけどもね。

容姿は、まあ自信はあると思うわ。
デュエルの腕も、友達の中では一番だったし。

・・・・・そろそろ受け入れましょうか、リアルを。

「えーと、一つ聞きたいんだけど」

「どうぞ」

「テンプレ？」

「えぇテンプレです」

当たって欲しくなかったけど、まさか当たるとはね。

「事情を理解してらっしゃるということは、このあとのこともお分かりですね？」

あぁはいはい特典ね。転生特典。
基本的にはだいたい三つくらいから五つくらいだったかしら。
てか行く場所を決められるなら遊戯王の世界に行きたいな。
あそこってデュエルだけでも生きていけるんでしょ？
だったら私にとってこれ以上最適な世界もないわね！

「行きたい世界は遊戯王ですね。受領いたしました」

えっ。心を読ま・・・あぁ、テンプレね。
心を読まれることすらすでにテンプレで片付けられるなんて、便利な世の中になったわ。

次は特典かしら。

「えぇそうです。四つまでなら叶えられます。そして私はミカエルです」

えっ。ミカエルとかテンプレじゃないじゃん。
てか天使長に頭下げさせるとか。私、外道じゃん。
あれ、なんか忘れてるような・・・ああ、特典ね。

「えっとー。じゃあオリカで構成されたデッキを三つ、自分で作れ

るようにしたいんだけど」

「その場合は三つ分の消費となりますが、いいですね？」

あーうー。ちょっとしょっぱいな。
でもまあオリカ創れるんだし。対等な対価かな。

「あと遊戯王の世界って、やたらと主人公サイドが特別な仕様なんですよね？」

「えぇ。カードゲームもこのような仕様となるなんて、誰もが予想できなかったでしょうね」

そりゃそうだ。
どこの世界にカードで世界を救うなんてあほなことが起こるのだろうか。
・・・・・私が今から行く世界か。

んー、特別な力が必要なら、私も貰っとこうかな。
原作介入じゃなくて、自衛？
だって私、遊戯王のアニメ見てないし。
仕事してたし、部活やってたし。

「あとの二つはどうしますか？」

「そうですね。一つは主人公たちに負けない程度の特別な力を下さ

い。もう一つは、んー、何にしようかな？　残りは、まあまあな資金を下さい」

「随分と現実的な要求ですね。ですが私は嫌いではありませんよ、そういうのは・・・・・・ですが、ドロー運などは要求しないのですか？」

それは当然でしょ。
だって、それは、

「自分自身がデッキの中に眠るキーカードを引き当てた時のあの満足感と興奮は、そんなまがい物では味わえないものなのよ。私は、それをどこでも感じたいだけなの」

そう、あの感覚だけは、同じデュエリストなら共感できるはずだ。

「・・・分かりました。そろそろ特典の受領も完了します。そしてあなたをかの世界に送る準備も完了しています。ここから送られるのも時間の問題です」

「そうですか。ありがとうございます。ところで一つ聞きたいんですけど」

「何です？」

今まで気になっていたこと。それは、

「私の死因ってなんですか？」

ぶっちゃけ気になるのもしかたがないだろう。
初めての経験なのだから。

「あぁ、それはですね。転落事故です」

転落事故？
どういうこと？

「あなたが死んだ時に歩いていた歩道橋は罅がありまして、それを補修したのはいいのですが、あなたが歩いていた場所にバグが発生してですね。あとはおそらくご想像通りです」

なーる。それならまあいいか。
ぶっちゃけ言うと、むしろ社会にさほど影響をなさない私が死んでいて助かった。
これがこの時死んだのが著名人なら大騒ぎだったろう。

「あなたは淡白な人ですね」

「生まれつきです」

あ。体が透けてきた。
そろそろ世界を渡る時が来たんだ。

「ご・・・運・・・」

なんて言ったかは聞き取れなかったけど、きっと激励してくれたんだろうな。
頑張らないとね。

プロローグ（後書き）

さてさっそく続きを執筆ＤＡ！

よろしければ拙作の別作品も見ていってくださいね。

遊奈「宣伝とか・・・ないわ・・・」

まあそう言うなって

次回　『サテライトの姫』

次回まで、ごきげんよう

一話『サテライトの姫　瀬川遊奈』

みなさん、どうもこんにちわ。
瀬川遊奈です。
あの白い空間から旅立って、早七年です。
十歳です。早いですね。

え？
なんでこんな投げやりかって？

それについてはですね、私が幼女化していたからよ！
気が付いたらだいたい三歳くらいのベビーボデーになってて驚いたわ。
でもまあよくある授乳プレイとか経験しなかっただけマシね。

そうそう今私がいる現在地なんだけどね、どうやら私サテライトってとこにいるみたい。
簡単に言うと廃棄物リサイクル施設ね。
なんか出来て間もないみたいだけど。
きっと気のせいね。

そうだ、白い空間で思い出したけど、まだオリカは創ってないわ。
起きたら横にＫＣ製のデュエルディスクと、ディスクにセットされてた生前の私のデッキがあったから、今はそれでいてるわ。
他のカードが欲しいなって思ったら、近くにカードが落ちてたりするしね。

そういえばその時に一緒にカードを拾う子がいて、その子とも仲良くなったわ。

名前は不動遊星っていったかな。
蟹みたいな髪の毛が印象的だったなぁ。
カードが揃ったらデュエルしようって約束したけども、あいにくと遊星がどこに住んでるかなんて聞いたことないし。
まあまたいつか会えるよね。
それよりも最近、困ってることがあるのよね。
それは・・・

「姫ー！　今日の飯、取ってきやした！」
「姫！　俺はレアカード拾ってきやした！」
「姫！　わしゃあ使えそうな家具を拾ってきやしたぜ！」
「姫！」「姫ー！」「ひーめー！」
「あぁもう、うっるさいな！　私の家に大人数で入ってくるなーーーーー！！！」

舎弟といいますか、家来といいますか。
とにかくそんな人たちが大量に来るんですよ。
尊敬に染まったきらきらした目を輝かせながら・・・ｏｒｚ。
なにがいったいどうなってこうなったか、みなさんに教えましょうかね。

※※※

あれは、まあ数ヶ月くらい前です。
神様補正か知りませんが、無法者が集うこのサテライトでも私はすくすく育ってたわ。
けっこう住みやすそうな場所も見つけました。

それから数日後のことね。

私の住処に、住人ちかくのデュエルギャングがやってきました。
彼らはそこにいた私に向かって、開口一番こう言ったのよ。

「ここは今日から俺達のアジトだ。慰み者になりたくなかったらとっとと失せな」

と。
とりあえずむかついた私は彼らに向かって言い返したわ。

「そういうのは実力で決めるのよ、このロリコンどもめがっ！」

ええ、バックベアード様ですね、わかります。
それにキレて、幼女（私）にデュエルをしかけてきた彼らですが、
まあ今の彼らの実態をしったなら想像するのも容易いでしょうね。

ええ、フルボッコしました（ドヤァ

といっても仕方ないと思いますけどね。
こんな環境で手に入るカードなんて知れてますし、いい感じのカードなら私と遊星と一緒にいた子供達があらかた回収しましたからね（ドヤァ

※※※

そんなわけで彼らは基本、それなりのバニラしか使いませんし、魔法・罠カードもほとんどありません。
そんな状況で、いいカードをそろえた私と戦っても、十中八九負けるでしょうね。

まあ？
心優しい私は、彼らを許して帰らせたのですが・・・。

・・・・・その結果がこれだよ。
笑いなさいよ。
あれが彼らにとっては始めての優しさだったそうで、今ではもうすっかり姫、姫と。
調子に乗った報いですかね。

それにしても最近は面白いことがないな。

遊星も私と話すときは顔を見ないし。
ジャックはキングごっこしてるし。
クロウは子供の世話ばかり。このロリショタコンめが！

ごめん嘘。だからゲイル投げようとしないで。

「おーい、変態ども。なんか面白いことないー？」

「姫、それならここいらにけっこう強いガキがいるって噂ですぜ。あと変態じゃねーです」

「案内なさい、変態」

「もちろんでさ！　あと変態じゃねーです」

ほんと、こいつらの返しは面白いわ。
ていうかサテライトで、遊星、ジャック、クロウ。
聞いたことあるわね。原作キャラだっけ？

ていうかもう一人、サテライト関連で誰かいたような。
友達にＭＡＤ見せてもらった時に見たんだけど・・・。
うがー！　思い出せない！
もういい！　会ったら思い出すでしょ！

一話『サテライトの姫　瀬川遊奈』（後書き）

次回からようやくデュエルです。

みなさんは、お分かりでしょうが、次回に出るのはあの人です。

みんな大好きですからね。

遊奈「誰よ？」

あなたも会えば分かるよ。

次回『満足少年』

それでは次回までごきげんよう

二話『満足少年の憂鬱　レッツ・サティスファクション！』

さぁ～て、来週の『遊戯王５Ｄ，ｓ　転生者です、ごきげんよう』は？

遊奈です。
今日はサテライトの中でも海沿いのところにやってきました。
変態たちがデュエルが強いという少年がいるというので、ついてきたらそこにいたのはＭＡＤで腹筋がお世話になったあの人だったんです。

私のデュエルディスクを見るなりデュエルを開始しようとする彼。
私はどうすれば・・・・？！

来週の『遊戯王５Ｄ，ｓ　転生者です、ごきげんよう』は

遊奈のデュエッ！
満足、私は満族
サティスファクション

の三本で送りいたします。
それでは来週まで。
じゃん、けん、ぽん！
うふふふふ。

「ふっざけんな、この変態どもーーーーーー！！」

「ひ、姫がご乱心だーーー！！」

「クリスティアは、どうかクリスティアは勘弁をーーーーー！！」

「なんまんだなんまんだ」

「なんなんだよ、こいつら」

水色の髪の毛の少年がぼやいてるが、今は彼に構っている暇はない。
というかその彼が問題なのだ。

だって彼の名前は、鬼柳京介。
５Ｄ，ｓで一番の知名度といっても過言ではないはずだ・・・・・・
たぶん。

彼を有名たらしめるその要因とは、すなわち満足だ。
いや何を言ってるのとかじゃなくて、まじで満足だ。
これ以外にいいようがない。

ＭＡＤのおともとして重宝され、その人気っぷりはとどまるところを知らず、全国に満族という固定のファンを作るほどだ。

私もＭＡＤで見た程度のにわかだが、彼は素晴らしい。いや腹筋クラッシャーだが、同時に涙腺クラッシャーの彼も知る私としては、あんな結末にはしたくないな。
彼を見た瞬間、私はだいたい忘れていた塵ほどの原作知識を思い出した。

遊星、ジャック、クロウってもろにメインキャラですやん。私ェ・・・・・。

「おい、お前ら。俺とデュエルしにきたんじゃねえのかよ？」
「そうだったわね。じゃあボコボコにして、満足してやるわ」
「満足？　いい言葉だな。なら俺もお前を倒して満足してやる」

あれ？
この頃ってもしかして、まだ無満足期？
満足ってそもそも知らなかったの？
えー。じゃあ私、変なことしちゃったよ。

でもまあいっかな。
デュエルするだけだし。

「始めようか」
「おう、行くぜ」
「「決闘（デュエル）！」」

遊奈
ＬＰ４０００
手札５
鬼柳

ＬＰ４０００
手札５

「先攻、俺のターン！」

手札５→６

「なにが来るのかな」

「俺はブラッド・ヴォルスを攻撃表示で召喚」

ブラッド・ヴォルス
ＡＴＫ１９００

うわあ、ソリッド・ヴィジョンってやっぱりパナいわね。
かっこいいなー。

そいえば、キャードって言わないね。
あれはダークシグナーの時だけなのかな？
まあいいや。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

鬼柳
場
ブラッド・ヴォルス（攻撃表示）
伏せカード一枚

今さらだけど、よくブラッド・ヴォルスなんて見つけたね。
なかなか見なかったのに。それもジャックに取られちゃったし。
別にいらないけどね。

「私のターン、ドロー」

手札5→6

これは・・・・・この手札はすごいわね。

「速攻魔法発動！　サイクロン！」

「ちっ、ヘイト・バスターがっ」

「そして手札の神秘の代行者アースを除外して、マスター・ヒュペリオンを特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン
ＡＴＫ２７００

まだ終わらないよ。

「手札からヘカテリスの効果発動。デッキから、神の居城―ヴァルハラを手札に加える」

「そいつは自分のフィールドにモンスターがいる時は発動できなかったんじゃねえか？」

「いやこれでいいよ。私が欲しかったのはコストだからね」

「何・・・だと・・・？」

いやこっちがそれだし。
なぜそのネタを知っているし。
でもなんか弄りやすそうだな。
まっ、今はデュエルに集中ってね。

「墓地のヘカテリスを除外し、マスター・ヒュペリオンの効果発動。あなたのブラッド・ヴォルスを破壊するわ！」

「ちぃっ！」

「まだ終わってないよ。私は奇跡の代行者ジュピターを通常召喚！」

奇跡の代行者ジュピター
ＡＴＫ１８００

「これで攻撃力の合計は４５００。あなたはライフはゼロだよ！」

「ワンキルだと！」

「いっけーーーー！！」

私の２体のモンスターから放たれた二つの光が、彼を包み込んだ。

ソリッド・ヴィジョンって衝撃はあるんだね。

彼・・・・・・っていうか鬼柳くんが軽く吹っ飛ばされちゃったよ。

「おーい、大丈夫？」

「おう、それにしてもお前強いな。俺は鬼柳京介だ。お前の名前はなんつうんだ？」

知ってます。なんて言ったら変だし、素直に初対面のふりしとこう。

「私は瀬川遊奈。私のことは気軽に遊奈と呼んで。私も京介って呼ぶから」

「ああ、これからもよろしくな遊奈」

その時、私は確信した。
彼はとんでもなく面白いことをしでかす、と。

これが後にサテライトの伝説となるチームサティスファクションのリーダー鬼柳京介と、サテライトの姫と呼ばれる瀬川遊奈の邂逅だった。

二話『満足少年の憂鬱　レッツ・サティスファクション！』（後書き）

今回使ったデッキは、今の環境で活躍中の代行天使ですね。
知人がストラクチャーデッキ買ってそのまま大会出たら、まさかのベスト４進出とかいうふざけたことをしでかしたデッキです。

てか効果みるだけでこんな風に動くんじゃね、と理解できるほどのシンプルさ。故に強力。
いや色んな動かし方があるとは思うんですけどね。
ＴＧ代行とか、色々種類もあるみたいですしね。

本編のほうですが、鬼柳さんとのフラグと思えそうな地の文入れましたが、カップリング成立させるのは蟹さんです。

あとジャックとカーリーです。
鬼柳さんはなぜか、横にいる女性がまったく思い浮かばない。なぜだ。
まあ鬼柳さんが満足してくださるなら、我々満族も無問題なんだけどもＮＥ！

遊奈「今回の後書き、長すぎじゃない？」

まあまあいいじゃん。

遊奈「前もそれで流された気がするけども、まあいいわ。それで次回は？」

ああ次回はまた時間が飛びます。
アニメ本編開始まで。

遊奈「早。でもまあそうじゃないと暇だしね」

お前は遊星と遊んでろ。

遊奈「だって最近、遊星ってば私の顔見ないもん」

これだから鈍感は。

よし、リア充は無視して次回予告だ。

次回『サテライトの赤き二つの流星』
それではみなさん、次回まで

遊奈「次回までごきげんよう」

取られたっ・・・・・・・！？

三話『サテライトの赤き二条の流星』（前書き）

どうも、クアンタです。
今回はようやくオリカ登場です。

そのオリカですが、まあ、ちょっとやっちゃった感があるので突っ込みはご遠慮ください。

三話『サテライトの赤き二条の流星』

京介との出会いから八年。あれから色んなことが起きた。
その中でも忘れられないことが、二つある。

それはチームサティスファクションのサテライト統一と、京介の逮捕だ。

大切な仲間がセキュリティに連行されてしまった。
それに同じサティスファクションのメンバーである彼らが関わっていたことが、京介を絶望させた。

連行されていく一部始終を見ていたが、あの時の京介の表情は忘れられない。
その時自分自身に抱いた無力感と、屈辱も。
友を救えないなんて、いや私は自分の保身に走ったのだ。
今更どうこう言う資格などないのだ。

とにかく、あの一件からメンバーと私たちのメンバーの間では、あの事件はタブーになった。
そう言えば二年前にジャックがシティに渡ったと遊星から聞いたけど、もしかして本当にキングになったのかな。
私の住処は電波が悪くてテレビが映らないからね。

「姫ー。そろそろ遊星さんのアジトに向かうんじゃないんですかー？」

「そうだったわね。私のD-ホイールはどうなっているの？」

「完璧に調整が完了してますぜ、姫！」

「そう。なら、大至急向かうわ！　あなた達はいつでも来なさい！」

「「「「姫がおられるところに俺らアリでさあ！　いつでも見守ってますぜ、姫！！」」」」

ああもう本当に、この変態どもはどうにかしてしばかないとね。
そう思ってるのに、笑えちゃうわ。
あいつらってほんとに、一緒にいてて楽しいもの。

ガレージについてみれば、そこに鎮座しているのはアジトの主たる私の足、D-ホイール。
その名もスカイ・フライヤー。
赤いボディは遊星のD-ホイール、遊星号と同じだった。

名前の由来は風を切る感覚が、空を飛んでるようだったからそう名づけた。
遊星も笑顔でいい名前だって褒めてくれたし、あの時は嬉しかったな。
なんでかは分かんないけど。

ヘルメットを被り、ハンドルを下ろす。
エンジンを作動させる。
私のD-ホイールは一般的なバイク型だ。
だからこそデザインも豊富で人気も高い。
でも私にはそれはあまり関係ない。

この甲高い回転音さえ聞けたならそれで満足できる。
それくらい私はD‐ホイールを、スカイ・フライヤーを愛している。
この風が後ろから追いかけてくるような感覚は、本当に最高だ。

※※※

「やっほー、遊びに来たよー」

「お、遊奈じゃん」

「なに・・・！」

「相変わらず、遊星は遊奈と聞くとすぐにそっちに向かうな」

「そりゃそうだろう、だって遊星は・・・」

「お前達！」

「はいはい、黙ってるよ」

なんか言い合ってるけど、どういうことだろ？
あ、ブリッツがため息ついてる。
なんか嫌なことでもあったのかな？

「遊奈。今日という今日こそは、俺とデュエルしてもらおうか」

「そうだね。私もやっと作ろうと思ってたデッキが完成したんだ」

そう。待ちに待ったオリカデッキ。

あーでもない、こーでもないと頭を捻って完成させたこのデッキで、遊星をぼこぼこに・・・。

『あー、あー。聞こえているか、ラリー・ドーソン。お前の居場所はすでに割れている。大人しく出てきて我々に連行されろ』

あ、あれってセキュリティの追跡ヘリじゃん。

てかまたラリーは盗んだのか。

今度は何を盗んだのよ。

「ラリー！　やっぱりあの部品は盗品だったんだな！」

「ご、ごめんよ。でも遊星が今作ってるD-ホイールは俺たちの希望だろ！？　だから早く完成してほしかったんだ！」

いくらなんでも行動力ありすぎでしょ。

それよりもD-ホイールの部品ってそう簡単に盗めるものなの？

「だからってなあ・・・」

「もうそれくらいでいいだろう。これ以上俺達で争っても仕方がない。お前達は逃げろ」

「遊星はどうするんだよ？」

「俺が・・・」

「俺が囮になる、でしょ？　私も手伝うわよ？」

そんな面白そうなこと、この私が見逃すわけないでしょうが！

「だが・・・」

「あーもう。そんな顔しないの。私の強さは知ってるでしょ？」

「実際にデュエルしたことはないんだが」

あはは、そういやそうだっけ。
まあいいや。
ライディングデュエルは滅多に出来ないんだけど、面白いし、それにけっこう向いてると思うから大丈夫でしょ。

「遊星はそっちから。私はこっちから行くよ」

「・・・分かった。無事で帰ってくるんだぞ」

「りょーかい。じゃあ私のアジトでね」

「ああ」

さーて行きましょうか。

飛び乗るようにしてD-ホイールにまたがり、ヘルメットを被って勢い良くペダルを踏みこむ。
Gに押されてシートに押し付けられるこの感覚は、やはり最高だ。

地上に続く坂から勢い良く飛び出る。
十数メートルほど飛んだあとに、着地して後ろを見る。

パトカーが一台に、D-ホイールが二台。

あ、一台がこっちに向かってきた。
これは好都合。
タイマンでいけるじゃん！

「む？　なんだ、貴様マーカー持ちではないのか・・・囮になったか、取り残されたか？」

「さあ？　どっちでしょう」

「ふん。貴様に構っている暇などないが、貴様もD-ホイールに乗っているのなら出来るのだろう？」

「もちろん。返り討ちにしてやるけど？」

「ほざけ。そうだな、私が勝ったら貴様のデッキと、そのＤ－ホイールは没収だ。永遠に帰っては来ないぞ」

そっちがその気なら、こっちだってなにか条件がないと割に合わないわ。
この世は全て、対価がないと駄目だからね。

「だったら私が勝ったら、今回の件には目を瞑ってもらおうかしら？」

「ふん、いいだろう。ただし、勝てたらの話だがな」

「上等！」

フィールド魔法、『スピード・ワールド』セット。
オート・パイロットは・・・なし！

「貴様、オート・パイロットなしだと！？」

「当然！　機械任せなんて、してられないわ！」

スタンバイ、完了。
もう準備は完璧ね。

あとは宣言だけ！

「さあ、行くわよ」

「ふん。始めようか」

「「決闘（デュエル）！！」」

遊奈
ＬＰ４０００
手札５
Ｓｐｃ０

セキュリティ
ＬＰ４０００
手札５
Ｓｐｃ０

「先攻は私が貰う、ドロー！」

セキュリティ
手札５→６

「私はゲート・ブロッカーを守備表示で召喚。ターンエンドだ」

セキュリティ
手札６→５
ゲート・ブロッカー
ＤＥＦ２０００

うわ、ゲート・ブロッカーだ。
あれって結構ひどいのよね。
守備力は高いわ、Ｓｐｃは増えないわで厄介なのよね。
でもあれを乗り越えてこそなんだけど。

「私はＧＮ-深緑の狙撃兵（ガンダムデュナメス）を攻撃表示で召喚」

遊奈
手札６→５
ＧＮ-深緑の狙撃兵
ＡＴＫ１６００

セキュリティ
Ｓｐｃ０→１

うん、分かってるから。
何も言わないで。

これは少し趣味が行き過ぎただけなの。悪ふざけじゃないの。
けっして作者がＯＯ好きなだけっていうわけじゃないの。

きちんと私も好きよ？

だからやっちゃったんだけども・・・。
まあいい子だってことを見せれば納得するわよね？
強さ的な意味で。

「私はカードを一枚伏せて、ターンを終了するわ」

遊奈
手札５→４

「私のターン、ドロー！」

遊奈
Ｓｐｃ０

セキュリティ
手札５→６
Ｓｐｃ１→２

「（・・・これは勝ったな）・・・私は手札のアサルト・ガンドッグ、華麗なる潜入工作員、ガード・ドッグを墓地に送り、モンタージュ・ドラゴンを特殊召喚する！　モンタージュ・ドラゴンの攻撃力は、この時墓地に送ったモンスターのレベル×３００ポイントの数値になる！」

セキュリティ
手札６→２
モンタージュ・ドラゴン
ＡＴＫ３０００

うっわ。
こ　れ　は　ひ　ど　い。

・・・手札が半分くらい事故ってるのに、どうしろって言うのよ、
この状況を。
いや、これをひっくり返すことが出来たら、最高なんだけどさ。

「モンタージュ・ドラゴンで、貴様のモンスターに攻撃！　パワー・
コラージュ！」

「くっ、リバースカード、オープン！　和睦の使者！　このターン、
私のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘で受けるダメージも０
になる！」

「ちっ。カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

セキュリティ
手札２→１

ここであの子が来なかったら、ぶっちゃけ終わったわね。

さて来てくれることを祈っておこうかな。

「私のターン・・・ドロー！」

遊奈
手札４→５
Ｓｐｃ０

セキュリティ
Ｓｐｃ２→３

あの子が来てくれることを信じて、思い切りドローする。
振りぬいた手に掴んでいるカードを見ると・・・。

来た！

「私はＧＮ-蒼穹の粒機兵（ガンダムエクシア）を攻撃表示で召喚！」

遊奈
手札５→４
ＧＮ-蒼穹の粒機兵
ＡＴＫ１９００

「そして自分フィールド上にＧＮと名のついたモンスターが存在することにより、ＧＮ-原初の粒機兵（オーガンダム）を特殊召喚する！」

遊奈
手札４→３
ＧＮ-原初の粒機兵
ＡＴＫ１０００

この二体が、私のエースを呼んでくれる！

「二つの想いが束ねられた時、新たな剣が舞い降りる！　コンタクト融合！　来て、ＧＮ-蒼穹の双粒機兵（ダブルオーガンダム）！！」

ＧＮ-蒼穹の双粒機兵
ＡＴＫ２４００

・・・かっこいいなぁ。
すごいね、これが生ダブルオーかー。私ＧＪ、超ＧＪ。
ソリッドビジョンもいい味だしてるね。

・・・ちょっと舞い上がってたわね。
さて、何もしなかったところを見るに、あの伏せカードは攻撃反応型かな？
それはそれで好都合だわ。

「ＧＮ-深緑の狙撃兵の効果発動！　自分フィールド上にこのカード以外のＧＮと名のついたモンスターが存在する場合、相手の魔法・罠カードを一枚破壊できる！」

「馬鹿な！」

「さらに、ＧＮ-蒼穹の双粒機兵の効果を発動！　手札を一枚墓地に送ることで、相手のカードを一枚破壊できる！　私が破壊するのは、モンタージュ・ドラゴン！　スプレッド・ライフル」

ダブルオーが放った拡散射撃が、モンタージュ・ドラゴンを吹き飛ばした。
あとはゲート・ブロッカーのみ。
でも若干攻撃力が届かない・・・。
！！
この方法なら、このターンで終わる！

「私はＳｐ-セイム・スピードを発動！　このターン、私のスピードカウンターは、相手のスピードカウンターと同じになる！　そしてエンドフェイズ時に０になる」

遊奈
手札３→２
Ｓｐｃ０→３

これで発動条件はそろった。
最後の効果も、私は元々０だったから関係ないし。

そもそもこのターンで終わらせるから、まったくの無意味だわ。

「さらに私はＳｐ-セカンド・チャンスを発動！　自分のスピードカウンターが２以上ある時、スピードカウンターを全て取り除き、自分のモンスターを一体手札に戻すことで、このターン自分のモンスター一体は二回攻撃できる！」

遊奈
手札２→１

「なんだと！？」

「私は、デュナメスを手札に戻して、ダブルオーを選択するわ！」

遊奈
手札１→２
これで準備は万端！

「ダブルオーでゲート・ブロッカーを攻撃！　ツインランス！」

ダブルオーがその手に持った剣――――ＧＮソード？で、ゲート・ブロッカーを切り裂いた。
これでもう壁はいない！

「ダブルオーで、ダイレクトアタック！」

「私のライフは残るぞ！」

「いいえ、あなたはこのターンで終わりよ。手札のＧＮ-深緑の狙撃兵の効果を発動！　自分のＧＮと名のついたモンスターが戦闘を行う場合、このカードを墓地に送ることで戦闘を行うモンスターの攻撃力は１６００ポイントアップする！」

「馬鹿な！？」

遊奈
手札２→１
ＧＮ-蒼穹の双粒機兵
ＡＴＫ２４００→４０００

「いけぇ、ダブルオー！　セカンド・ツインランス！」

「ぐぉわーーーー！！」

ダブルオーの二撃目が、セキュリティに直撃した。
彼のモニターには、ＤＥＦＥＡＴと表示されスリップしながら停止した。
それを横目で見ながら、颯爽と私は離れていく。
とても爽快だった。

やはりライディング・デュエルは楽しい。最高だ。
風を切りながら、勝利するのは快感だ。

そのまま私は、アジトへと戻っていった。
今度は遊星ともデュエルしたいものね。まる。

三話『サテライトの赤き二条の流星』（後書き）

まあ、これはひどいと言えるものですね。
じゃあオリカ紹介でもしましょうか。

ＧＮ‐蒼穹の粒機兵　（ガンダムエクシア）
効果モンスター
レベル４／光属性／機械族／攻撃力１９００／守備力１２００
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていればその数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。
このカードが戦闘で破壊された時、手札またはデッキから「ＧＮ－粒機兵（エクシアリペア）の残骸」を特殊召喚する。

ＧＮ‐深緑の狙撃兵　（ガンダムデュナメス）
レベル４／光属性／機械族／攻撃力１６００／守備力１０００
効果モンスター
自分フィールド上にこのカード以外の「ＧＮ」と名のついたモンスターが存在する場合、一ターンに一度だけ相手の魔法・罠カードを一枚破壊できる。
自分の「ＧＮ」と名のついたモンスターが戦闘を行う場合、このカードを手札から墓地に送ることで戦闘を行うモンスターの攻撃力を１６００ポイントアップする。

ＧＮ‐原初の粒機兵　（オーガンダム）
レベル２／光属性／機械族／攻撃力１０００／守備力８００
チューナー（効果モンスター）
自分フィールド上に「ＧＮ」と名のついたモンスターが二体以上存

在する場合、このカードは特殊召喚することができる。
このカードは一ターンに一度まで、戦闘では破壊されない。

ＧＮ-蒼穹の双粒機兵　（ダブルオーガンダム）
レベル６／光属性／機械族／攻撃力２４００／守備力２０００
融合・効果モンスター
「ＧＮ-蒼穹の粒機兵」＋「ＧＮ-原初の粒機兵」
このカードは自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻すことで、エクストラデッキから特殊召喚することが可能（「融合」魔法カードは必要としない）。
手札のカードを一枚墓地に送ることで、相手フィールド上のカードを一枚破壊することができる。

Ｓｐ-セイム・スピード
通常魔法
このカードを発動したターン、自分のスピードカウンターは相手と同じになる。
このカードを発動したターンのエンドフェイズ時、自分のスピードカウンターは０になる。

Ｓｐ-セカンド・チャンス
通常魔法
自分のスピードカウンターが２つ以上ある場合に発動することができる。
自分のスピードカウンターを全て取り除き自分のモンスター一体を手札に戻すことで、自分のモンスター一体はこのターン二回攻撃できる。

こんなもんでしょうかね。

遊奈「自分で作っておきながら、これはひどいわね」

デュナメスのノーコスト破壊はけっこう強いと思います。
あとエクシアも切り込み役ができますし、戦闘破壊されても壁が出てきますしね。

個人的にダブルオーはやればできる子だと思いますが、ほどほどに、ね。

・・・・・・正直、ライザーはどうやって出そう・・・・。
困ったな。

遊奈「普通に出せば？」

いや個人的にはちょっと凝りたいし。

遊奈「わがままねー。まあ私もカッコイイ感じで出したいしねー」

gdgdになってきたので、そろそろ終わりますか。

次回『二つ目のオリカ！　エスペリオデッキ』
それではみなさん、次回までごきげんよう。

四話『二つ目のオリカ！　エスペリオデッキ　』（前書き）

タイトル通り、今回は二つ目のオリカデッキです。

四話『二つ目のオリカ！　エスペリオデッキ　』

セキュリティに追われることになった、ラリーの窃盗から数日が経った。
遊星はシティに行くためにD-ホイールの点検を行っている。

私はといえば、オリカで構成したデッキを見ていた。
デュエル中に、あれ？　どうやるんだっけ？とか考えてたら時間の無駄じゃない？
だからすぐに動けるようにコンボとか覚えておくのよ。

そんなこんなで暇つぶしをしていたら、ブリッツたちが帰ってきた。
見るとどこか不満げだ。
なにかあったのかしら？

「ブリッツ、なにかあったの？」

「え？　いや、あったといえばあったが、ないといえばないな」

「煮え切らないわね。はっきり言いなさい！」

「ひっ。いやいやマジでなんもなかったって」

本当かしらね？
そんな風に思ってじっと見るけど、目をそらされた。
問い詰めようとしたけど、誰かの気配がした。

「よぅ、ブリッツくん。ここがお前らのアジトか？　いいとこに住んでんじゃねえか」

「こんなとこ、お前らにゃあ勿体ねえぜ。瓜生の兄貴、この連中をどかして、俺らで住みましょうよ」

「それも悪くないな・・・お。それはD-ホイールか。お前らには無駄なもんだろ？　代わりに俺がもらってやる」

こいつら・・・人が黙ってたら好き勝手言って。
ぶっ潰そうかしら。

「こ、これは俺達の希望なんだ。お前達になんか、やるかよ！」

「んだと！？」

「ラリー、ここは俺が相手する。お前は下がっているんだ」

「う、うん。分かった」

あ、遊星が怒ってる。
まあ、あんな風に言われたら怒るわよね。

「じゃあ私は見物でも・・・」

「おうおう遊奈ちゃんよぉ！　木村様がお前のＤ－ホイールを貰いに来たぜ！！」

「はあ。ウザイのが来たわ」

今入ってきた奴は木村。
ここ数日前から、私のＤ－ホイールを奪いに来るやつ。
いつもは例の変態たちが撃退してるんだけど、今日は出かけてるから私が相手しないといけない。
憂鬱だわ。

「どうしたよ、そんなツラしてよ！　とうとう観念したか？」

「そうね。毎日来られてもうるさいし、ここらで決着つけないとね」

「へん、そうこねぇとな！　俺とデュエルして、俺が勝ったらそいつは貰う！　ただし俺が負けたら、一切ここにゃあ近づかない！」

「それでいいわ」

ほんとに面倒だわ。
ラリーたちが心配そうな顔してるけど、私の実力を忘れたのかしら？

「じゃあ・・・」

「始めようか」

「「決闘（デュエル）！！」」

遊奈
ＬＰ４０００
手札５

木村
ＬＰ４０００
手札５

「俺の先攻、ドロー！」

木村
手札５→６

何が来るのかしらね。

「俺は暗黒界の狂王ブロンを攻撃表示で召喚！　ターンエンド！」

木村
手札６→５
暗黒界の狂王ブロン
ＡＴＫ１８００

あれ、カード伏せないの？
いや簡単に勝たせてくれるならそれでいいけど・・・。

「私のターン、ドロー」

遊奈
手札６→５

うぅん、まあまあね。
それほど悪くはないけど、魔法・罠がないわね。
ま、いいかな。

「私はエスペリオ・ネーサを守備表示で召喚。ターンエンド」

遊奈
手札６→５
エスペリオ・ネーサ
ＤＥＦ８００

身を丸めた小悪魔っぽい女の子が現れた。
うん、可愛い。
けど次のターン、大丈夫かな？
この子はリクルーターだから一応は安心はできるけど・・・。

「俺のターン、ドロー！」

木村
手札５→６

「俺は永続魔法、暗黒界の取引を発動！　お互いにカードを一枚ドローし、その後カードを一枚墓地に送る！」

遊奈５→６→５

木村４→５→４

まずい。
暗黒界の猛攻が始まる！

「手札から墓地に送られたことにより、暗黒界の武神ゴルドを墓地から特殊召喚！」

暗黒界の武神ゴルド
ＡＴＫ２３００

うわ・・・。
自分で捨てたのに戻ってくるとか、ひどすぎるわ。
なにあのインチキ効果。

「俺はゴルドでエスペリオ・ネーサに攻撃！」

ゴルドによってネーサが破壊された。
あぁ・・・ネーサが半泣きで消えていった。
けど、この子は他のリクルーターとは違うのよ！

「ネーサの効果発動！　この子が戦闘破壊された場合、デッキから同名のカードを特殊召喚する！」

エスペリオ・ネーサ
ＤＥＦ８００

他のリクルーターと違うところ。
それは表示形式を選べること。

基本、リクルーターは攻撃表示か、守備表示で特殊召喚される。
けれどこの子はその前提を覆す・・・！

その分、能力値は低いんだけどさ。

「ちっ。攻撃しても無駄か。なら、このままターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！」

遊奈

手札５→６

この状況をひっくり返せるカード。
お願い・・・来て・・・。
そっと見てみると・・・。

「来た！　私のフィールドにエスペリオと名のついたモンスターがいることで、エスペリオ・ヤッサを特殊召喚する！」

遊奈
手札６→５
エスペリオ・ヤッサ
ＡＴＫ１６００

まだ終わりじゃないよ・・・。
あれ、これ前も言ったような。
多分気のせいだね。

「そして私はチューナーモンスター、エスペリオ・フローターを召喚！」

遊奈
手札５→４
エスペリオ・フローター
ＡＴＫ０

これでシンクロができるわ。
このデッキのコンセプトはそれなりの継戦能力を持たせつつ、シンクロさせること！
本当なら、遊星みたいにローレベルシンクロが狙えるんだけど、今回は大きいのが出るわよ！

「レベル３のエスペリオ・ネーサとレベル４のエスペリオ・ヤッサに、レベル１のエスペリオ・フローターをチューニング！」

一輪の輪の中に、七つの星が並ぶ。
それを見ながら、シンクロ口上を口にする。

「暗き闇の底の王者が、深淵に引きずり込む。シンクロ召喚。絶望を抱かせろ、エスペリオ・ジェノサイドキング！」

エスペリオ・ジェノサイドキング
ＡＴＫ２９００

王様が着るような豪奢な服装を纏った銀色の悪魔が、私のフィールドに仁王立ちしている。
やはりソリッドビジョンは最高だ。
これを作ったＫＣは素晴らしい。

「な！　攻撃力２９００だと！？」

「ジェノサイドキングの効果発動！　このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地のエスペリオと名のつくモンスターを特殊召喚する！　私は墓地のエスペリオ・アタッカーを選択する！」

「そんなモンスター、いつの間に！？」

「あんたの暗黒界の取引の効果よ・・・まあ、この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃力・守備力は半減し、効果も無効化されるのだけどね」

エスペリオ・アタッカー
ＡＴＫ１１００

でも、攻撃表示でだしたのは攻撃させるためじゃないんだけどね。

「そして魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札のモンスターを墓地に送り、デッキからレベル１のモンスターを特殊召喚する」

「まだ出るのか！？」

遊奈
手札４→２

「私は二体目のエスペリオ・フローターを特殊召喚！」

「またチューナー・・・ということは！」

「ご名答・・・私はレベル５のエスペリオ・アタッカーにレベル１のエスペリオ・フローターをチューニング！」

今度は一輪の輪に対して、五つの星が現れた。
そして再び、シンクロ口上を口にする。
・・・余談だけど、これが一番苦戦した。
なかなかかっこいいのが浮かばなかったから。

「暗き闇の底で鍛えられし剣が、今ここに！　シンクロ召喚！　エスペリオ・ウォリアー！」

エスペリオ・ウォリアー
ＡＴＫ２４００

二体目のエスペリオのシンクロモンスター。
現実で言うなら、インフェルニティのデッキコンセプトに似てるかもしれない。
圧倒的な展開力とともにシンクロを連打。
・・・うん、似てるわ。

「馬鹿な・・・二体目のシンクロモンスター・・・！」

「挑む相手を間違えているのよ、あんた」

こっちはチートカード群ｂｙミカエルよ？
主人公補正とか、あんなチートがないのに、勝てるわけないじゃない。

「バトル・・・ジェノサイドキングで、ゴルドを攻撃。ジェノサイド・バーン！」

「くぅ！」

木村
ＬＰ４０００→３４００

ジェノサイドキングの放った銀色のビーム的なものが、ゴルドを破壊する。
門とかがないとそれなりの打点のモンスターでしかないわ。
バックがないからなおさらね。

「エスペリオ・ウォリアーで、ブロンに攻撃。そしてこの時、エスペリオ・ウォリアーの効果発動！　このカードが攻撃する時、墓地のエスペリオと名のついたモンスターを除外することで、そのモンスターの攻撃力をエスペリオ・ウォリアーに加える！　私が除外するのは、エスペリオ・アタッカー！」

エスペリオ・ウォリアー
ＡＴＫ２４００→４６００

「なんだ、そのふざけた効果は！？」

「悪く思わないでね。エスペリオン・スラッシュ！」

「ぬあぁーーーーーーー！」

木村
ＬＰ３４００→６００

うぅ、ぎりぎり残っちゃった。
こういう時って結構怖いのよね。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

遊奈
手札２→１

「俺のターン、ドロー」

木村
手札４→５

「来た！　俺は暗黒界の取引の効果発動！　お互いに手札を一枚捨てて、一枚ドローだ」

遊奈
手札１→０→１

木村
手札５→４→５
ニヤリと、木村が笑った。あの顔はきっとキーカードを引いたわね。

「墓地に送られた暗黒界の武神ゴルドは特殊召喚できる」

暗黒界の武神ゴルド
ＡＴＫ２３００

「そして永続魔法、一族の結束を発動！」

木村
手札５→４
暗黒界の武神ゴルド
ＡＴＫ２３００→３１００
攻撃力がジェノサイドキングを上回った！？
でも、私の伏せカードは聖なるバリアーミラーフォースー。
これで、あのインチキ野郎もイチコロよ！

「さらに暗黒界の雷を発動！」

あ、やば。
ミラフォが・・・・・・。

「手札を一枚墓地に送り、その伏せカードを破壊する！」

木村
手札４→２

あー、ミラフォが。
でも一応はまだ対策はあるんだけどさ。
ていうかさっき、取引の効果で引いたんだけども。

「これで締めだ。ライトニング・ボルテックスを発動だ！」

木村
手札２→０

ぎゃあ！
これはひどいわ。
一発で状況が。

「ゴルドでダイレクトアタックだ！」

「うぐぅ」

遊奈
ＬＰ４０００→９００

「俺はこれでターンエンドだ。次で勝負が決まるなぁ、遊奈ちゃんよ？」

まだ大丈夫。
これ以上出てきたらやばかったけど、これで打ち止めなら勝機は十分以上にあるわ！

「これが私のラストターンね、ドロー！」

遊奈
手札１→２

ふっ、私の勝ちね。
運命は私に味方したわ。

「私はエスペリオ・コスタを召喚。そして、エスペリオ・コスタの効果を発動。墓地のレベル３以下のエスペリオと名のつくモンスター１体を特殊召喚」

遊奈
手札２→１
エスペリオ・コスタ
ＡＴＫ７００

「私は、墓地のエスペリオ・フローターを特殊召喚！」

エスペリオ・フローター
ＡＴＫ０

「そして自分フィールドにエスペリオと名のつくモンスターが存在することにより、エスペリオ・ヤッサを特殊召喚！」

遊奈
手札１→０
エスペリオ・ヤッサ
ＡＴＫ１６００

これがこのデュエルでの最後のシンクロ。
呼ぶのはこのデッキでのエースモンスター！

「レベル３のエスペリオ・コスタとレベル４のエスペリオ・ヤッサに、レベル１のエスペリオ・フローターをチューニング！」

一輪の輪の中で、七つの星が一列に並ぶ。
そして私はその光景を見ながらシンクロ口上を口にする。

「暗き闇の底より、大いなる竜が飛び立つ。其は黒き翼なり。シンクロ召喚。飛翔せよ、エスペリオ・フライング・ドラゴン！」

エスペリオ・フライング・ドラゴン
ＡＴＫ３０００

現れたのは黒い竜。
色の深さでいえば、真紅眼の黒竜よりも黒い。
その姿は、どことなく遊星が持っていたスターダスト・ドラゴンと似ている。

つまり、何が言いたいかと言えば、

「ふつくしい・・・・・・・」

「おお・・・・・・！」

こんなとこだろう。
対戦相手の木村でさえ感嘆している。
でも見とれてるのを邪魔するみたいで悪いけど、この子の能力は酷

いよ？

「エスペリオ・フライングの効果を発動するわ。一ターンに一度、墓地のエスペリオと名のつくカードを三枚まで除外し、除外した枚数だけフィールド上のカードを持ち主の手札に戻すことができる」

「バウンスだと！？」

「墓地のエスペリオ・フローターを除外して、あんたのゴルドを手札に戻す」

これで木村のフィールドには暗黒界の取引だけ。
壁もいない。
あとは攻撃するだけね。

「ちょっとてこずったわね。エスペリオ・フライング・ドラゴンで、ダイレクトアタック。スカイ・ブラスト！」

木村
ＬＰ６００→０

エスペリオ・フライング・ドラゴンの口から放たれた黒い衝撃波が、木村に直撃した。
・・・・・・いや比喩よ？
闇のデュエルじゃないんだからさ。
それにしても、なんか私はこっちよりもＧＮデッキもといダブルオ

ーデッキの方が使いやすかったわ。
なんでかしら？
私がダブルオー厨だから、ってそんなに厨でもないんだけど。

とりあえず遊星の方は見たらタイミングが良かったのか、ちょうどデュエルは終わっていた。
てかあの台詞ってジャックのじゃない。
あれ、気にいってるのかしら？

そうそう、あのあと木村はもう会わないから写真撮ろうと言ってきたので撮っといた。
遊星にひっついたらなんか顔が赤かった。
さっきのデュエルでの興奮が収まっていないのだろうか？
デュエルって興奮しちゃうよね、特に逆転した時とかさ。

そんなことを考えていたら全員にため息つかれた。
一体なんだって言うのかしらね。

四話『二つ目のオリカ！　エスペリオデッキ　』（後書き）

どうでしたでしょうか、今回のオリカは？
個人的にはこっちよりも、ダブルオーデッキの方が好きなんですが。

次回は簡単な設定です。
遊奈はどんな感じの人物なのかっていうのを適当に書きます。

遊奈「ちょっと（怒）？」

まあまあいいじゃない、そんなん気にしないだろ？

遊奈「まあそんなんだけども・・・・・・ねぇ？」

しっかり書けと？
ならスリーサイズまで書くけど？

遊奈「・・・・・・」

あ、黙った。
じゃ、適当にやってもいいか。

それでは次回『設定1』
皆様、次の機会まで、ごきげんよう！

遊奈「設定1ってタイトルはどうかと思うなー」

設定（前書き）

今回は設定ＤＥＡＴＨ！

・・・・・・ではなく設定です。

設定

瀬川遊奈
年齢：１８歳（遊星と同い年）
容姿：白髪赤目（アルビノでは無い）の美女
余談ながら作者は白髪キャラが好き
性格：さっぱりして明るい性格。あと鈍感。他人のことには鋭い、でも自分のことには鈍い。つまり鈍感（大事なことなので二回言いました）
身長：１６７ｃｍ
体重：ヒ・ミ・ツ
スリーサイズ：これもヒミツ・・・・・けどあえて言うならスタイルは良いわ。あと巨乳ね。アキほどじゃないけど。

使用デッキ：代行天使（ただしもう使わない？）・ダブルオーデッキ（ＧＮデッキとも呼ぶ）・エスペリオデッキ（展開次第では無くなる？）

オリカ紹介
既出のダブルオー系オリカについては三話参照を願います

エスペリオ系列

エスペリオ・ネーサ
効果モンスター
レベル３／闇属性／悪魔族／攻撃力１２００／守備力８００
このカードが戦闘で破壊された場合、手札またはデッキから「エスペリオ・ネーサ」１体を特殊召喚する。

エスペリオ・ヤッサ
効果モンスター
レベル４／闇属性／悪魔族／攻撃力１６００／守備力１０００
自分フィールド上に「エスペリオ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは特殊召喚できる。

エスペリオ・フローター
チューナー（効果モンスター）
レベル１／闇属性／悪魔族／攻撃力０／守備力０
このカードは戦闘では破壊されない。
自分フィールド上に「エスペリオ」と名のついたモンスターが存在し、このカードが特殊召喚に成功した時、自分はデッキからカードを一枚ドローする。

正直この効果は一度も使いませんでした。
要反省ですね。まる。

エスペリオ・ジェノサイドキング
シンクロ・効果モンスター
レベル８／闇属性／悪魔族／攻撃力２９００／守備力２０００
闇属性チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードのシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「エスペリオ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力・守備力は元々の数値の半分になる。

エスペリオ・アタッカー
効果モンスター
レベル５／闇属性／悪魔族／攻撃力２２００／守備力１２００
このカードのアドバンス召喚に成功した時、このカードの攻撃力はリリースしたモンスターのレベルの合計×２００ポイントアップする。

・・・・・・実用性ないな、このカード。

エスペリオ・ウォリアー
シンクロ・効果モンスター
レベル６／闇属性／戦士族／攻撃力２４００／守備力１５００
チューナー＋「エスペリオ」と名のついたモンスター１体以上
このカードが戦闘を行う場合、墓地に存在する「エスペリオ」と名のついたモンスターを除外することで、このカードの攻撃力・守備力はそのモンスターの攻撃力の数値分アップする。

エスペリオ・コスタ
効果モンスター
レベル３／闇属性／戦士族／攻撃力７００／守備力１６００
このカードの召喚に成功した時、墓地に存在するレベル３以下の「エスペリオ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚できる。
このカードが破壊される場合、手札のカード一枚を墓地に送ることで破壊を無効に出来る。

エスペリオ・フライング・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター
レベル８／闇属性／ドラゴン族／攻撃力３０００／守備力２５００
闇属性チューナー＋「エスペリオ」と名のついたモンスター１体以上
一ターンに一度、墓地の闇属性モンスターを三体まで除外すること
で、除外した枚数まで相手フィールド上のカードを手札に戻す。
このカードは魔法・罠カードの効果の対象にならない。

・・・・・これはやりすぎかな。
まあ欠点を挙げるなら・・・蘇生とかが出来ないくらいかな。
バックが豊富なら、ほぼ敵なしでしょう。

続いて、Ｄ－ホイールの説明・・・要りますかね？

スカイ・フライヤー
遊奈と愉快な仲間達によって作られたＤ－ホイール。
遊星号と同じくジャンクパーツによって作られている。
メ蟹ックでお馴染みの遊星も設計・組み立てに参加しているが、諸事情により遊星号よりもドＭ仕様になっている。
諸事情には突っ込まない方針で・・・。

遊星号と同じ赤いボディカラーであり、ハイブリッドタイプでもある。
全体的に遊星号と似ている。

設定（後書き）

どうでしたでしょうか。
なんか書いてて「ぼくのかんがえたさいきょうのかーど」というフレーズがずっと頭の中でぐるぐるしてました。
これが主人公最強モノ、そしてオリカが絡むということなのか・・・・！

恐怖・・・・・・！　圧倒的恐怖・・・・・・！

まああほな事は放っておいて、とりあえず次回予告です。

ジャックが所持するスターダスト・ドラゴンを取り返すために、シティへと行くことを決意する遊星。
セキュリティへのハッキングを行い、唯一の通過経路を見つける！
しかしそこを通るには五分の猶予しかなく・・・！
さらに運悪く以前戦った牛尾とセキュリティの一人に見つかり・・・・！

デュエルには勝ったものの、遊奈は間に合わず、流れ来る廃棄品に呑み込まれる・・・！

遊奈は無事に帰ってこれるのか・・・・！

遊星「遊奈・・・生きていてくれ・・・・！」

次回、第五話『遊奈、死す』

デュエル、スタンバイ！

遊奈「こらーーーーーーーーーーー！！」

五話『駆け抜ける遊星！想いは共に』（前書き）

今回はシティ突入です。
基本、拙作は遊奈の一人称で進める予定ですが、他の人物の一人称
または三人称で進めるのもいいかなーとも思っています。
よって時々、そのようになると思います。

それでは・・・どうぞ。

五話『駆け抜ける遊星！想いは共に』

諸君、あれから数日が経った。
あれからっていつからだと？
そんなもの言える訳ないだろう！

こほん、すまないね。少々取り乱したようだ。
改めて朝の挨拶、即ち『おはよう』を「「おはようございまーす、姫！」」挨拶はすでに終わっている！！
私語は慎め！

「遊奈、朝飯が出来たようだが・・・」

「え！　今行く！」

諸君、続きは・・・・・・そうだな、ＷＥＢで。
これが瀬川遊奈の一日の、始まり・・・・・・！

「変なナレーションを流すな！」

「・・・・・・遊奈？」

「やめて！　そんな可哀相なものを見るような目で見ないで！」

「大丈夫だ、遊奈。たとえ遊奈がどんなことになっても俺は受け止

めてみせる」

その優しさが痛い！？

※※※

時間は飛んで夜。

遊星のシティ進入作戦までそろそろね。

命名は私よ。

さてそろそろ廃棄物の流出が止まる頃ね。

え？　何が始まるのかって？

そりゃあナニに・・・て遊星、そんなに見ないで。

冗談だってば・・・。

「んんっ。さて遊星、出発よ。準備は？」

「大丈夫だ。遊奈も、本当に良いのか？」

「へーきよ。そっちこそ、間に合わなかったとかいう事にならないようにしなさいよ」

私たちの労力が無駄になるじゃない。

・・・・・・そろそろ行かないとね。

「遊星！」

「ああ」

言葉を交し合い、D-ホイールを走らせる。
今回の目的は、ただ遊星を無事にシティに到着させること。
ただ、それだけ。

本来なら一人でも大丈夫だと思うけど、念には念を押して私も途中まで一緒に行くことになった。
ていうか、私がついていくことにした。
いやなんとなく・・・・・・妙な胸騒ぎがしてね。

・・・・・・あれ、これフラグ？
変なフラグ立てちゃった？
・・・・・・いやいやねー、もしかしたらあるかも。

ないよね？

※※※

私たちは今、廃棄物処理施設に来ている。
ここの地下からシティに伸びている廃棄物を流し込むパイプが通っ

ている。
パイプとは言ってもかなりデカイけれど・・・。

・・・？

今、後ろからセキュリティのサイレンが聞こえたような・・・。

「待ちやがれ、屑野郎どもぉー！」

本当にフラグだったんだ、あれ。
・・・って今はそんなこと言ってる場合じゃなくて！

「遊星！」

「分かってる。遊奈、ここは任せてもいいか？」

「モチよ。さっさと行きなさい」

遊星はひとつ頷くと、D-ホイールを加速させる。
そのまま夜の闇に消えていった。

「待ちやがれ！」

「あんたこそ待ちなさい」

言葉とともにD-ホイールをぶつける。
・・・が巧みに避けられてしまった。
意外と上手い操縦に目を瞠っていると、横合いから衝撃が来た。

「ふん、久しぶりだな。貴様とあの男のお陰で、上からの私と牛尾への信用が薄くなってしまってな。私怨で悪いが、私とデュエルしてもらうぞ」

「あんたはあの時の・・・」

思い出されるのはラリー窃盗事件の時に追いかけてきたセキュリティの男だ。
まさかこれがフラグ・・・！？
あ、もちろん悪い意味のね。

「牛尾！　先に行け！」

「助かるぜ、竹虎！」

どうやらこのセキュリティの男は竹虎という名らしい。
・・・て、そうじゃなーい！
あの牛尾という男が加速していく。
私が止めないといけないのに・・・。

「待ちなさい、あんたは私が足止めを・・・」

「いいや、貴様とデュエルするのはこの私だ。フィールド魔法、スピード・ワールド。強制発動！」

『スピード・ワールド、セット・オン。パイロットモード・・・マニュアル』

あ、マニュアルのままだ・・・。
でもさっさと終わらせるためにはこれでいいかな？

「ふん、貴様がマニュアルだろうが、私には関係ない。新たに得た特殊追跡デッキで打ち倒してくれる！」

「特殊、追跡デッキ・・・」

なんか強そう。
けど、私だって負けないってね。

「さっさと決着つけたいから・・・」

「ふん、忙しない奴だ。いいだろう・・・」

「「決闘（デュエル）！！」」

遊奈
ＬＰ４０００
手札５

竹虎
ＬＰ４０００
手札５

「私が先攻を貰う！　ドロー！」

竹虎
手札５→６

「私はゲート・ブロッカーを守備表示で召喚。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

竹虎
手札６→４
ゲート・ブロッカー
ＤＥＦ２０００

またあいつか。
けど初手で出されたら厄介だし、なかなかのステータスを持つ壁だから、全くおかしくない
選択なのよね。

「私のターン、ドロー」

遊奈
手札５→６
Ｓｐｃ０

竹虎
Ｓｐｃ０→１

やっぱりゲート・ブロッカーの効果は厄介・・・！
・・・けど手が無いわ。
ここは様子見ね。

「私はＧＮ－明橙（ガンダムキュリオス）の可変機兵を攻撃表示で召喚」

遊奈
手札６→５
ＧＮ－明橙の可変機兵
ＡＴＫ１５００

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札5→3

「ふっ、手段がないか？」

「うっさいわね。次のターンから反撃すんのよ」

「ほぅ、そのチャンスが来るといいがな？　私のターン、ドロー」

竹虎
手札4→5
Spc1→2

遊奈
Spc0

ああは言ったけど、流石にこの状況はまずい・・・。
二枚作れたとは言ったけど、あの子がいないとこのデッキはパワー不足だからなぁ・・・。

「私はチューナーモンスター、ジュッテ・ナイトを召喚！」

竹虎
手札5→4

「チューナー！？　まさか・・・」

「いかにも・・・レベル４のゲート・ブロッカーにレベル２のジュッテ・ナイトをチューニング！　さあ行くぞ、シンクロ召喚！　ゴヨウ・ガーディアン！」

ゴヨウ・ガーディアン
ＡＴＫ２８００

はわわわ・・・当時の環境を荒らしまくった奴来たーーー！！
そういえば友達がアニメの方でもゴヨウしてたとか言ってたけど、こういうことなのーー！？

「ふ、これが権力の力！　いけ、ゴヨウ・ガーディアン。奴のモンスターに攻撃だ、ゴヨウ・ラリアット！」

「させない、リバースカード、オープン！　くず鉄のかかし！　相手モンスター一体の攻撃を無効にする！」

「防いだか・・・だが、そう来なくてはな。こんなに簡単にやられてもらっては困る」

「・・・くず鉄のかかしは効果発動後、墓地には行かずに再びセットされる」

なんとか凌いだけど、多分長くは続かない。
キュリオスの攻撃力はそれほど高くない。
それなりの打点を持ったモンスターを出されたら・・・持たない。

「私はこのままターンエンド。さあ、どう足掻く？」

「くっ、むかつく奴ね。私にだって、色んな手はあるのよ！　ドロー！」

遊奈
手札３→４
Ｓｐｃ０→１

竹虎
Ｓｐｃ２→３

ゲート・ブロッカーがいないお陰で、私のスピード・カウンターが増える。

・・・これじゃあ雀の涙くらいにしか意味は無いけど。

「ＧＮ－蒼穹の粒機兵（ガンダムエクシア）を攻撃表示で召喚」

遊奈
手札４→３
ＧＮ－蒼穹の粒機兵
ＡＴＫ１９００

・・・念のためにキュリオスは守備表示にしておこう。

「キュリオスを守備表示にし、ターンエンド」

ＧＮ－明橙の可変機兵
ＤＥＦ１２００

「ふ、ははははは！　もう終わりか、万策尽きたか！？」

「うるさいわね！　さっさと進めなさいよ、こっちも急いでんのよ！」

「ふん、小うるさい女だ。私のターンだ、ドロー」

遊奈
Ｓｐｃ１→２

竹虎
手札４→５
Ｓｐｃ３→４

「ふ、私はＳｐ－ソニック・バスターを発動！　このカードはスピード・カウンターが四つある時に発動できる！」

竹虎
手札５→４

「やばい！」

「自分のモンスターを１体選択し、そのモンスターの攻撃力の半分の数値のダメージを、相手ライフに与える！　私はゴヨウ・ガーディアンを選択！　よって、貴様に１４００ポイントのダメージ！」

「ぐぅぅ・・・」

遊奈
ＬＰ４０００→２６００
Ｓｐｃ２→１

この程度なら、まだなんとか・・・！

「ふん、これで終わりと思ったか？　私は、Ｓｐ－ダッシュ・ピルファーを発動！」

竹虎
手札４→３

「なっ・・・！」

「スピードカウンターが四つ以上ある時、相手の表側守備表示モンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る。私は、その羽根

つきを貰う」

なんでその呼び方を・・・！
・・・でもそれは悪手ね。

「キュリオスの効果発動！　このカードのコントロールが相手に移ったとき、相手に８００ポイントのダメージを与える！」

「馬鹿な・・・！」

竹虎
ＬＰ４０００→３２００

ピンポイントだけど、効果はあるのよね。
ライディングだとそんなに使えないけど、スタンディングだとコントロールを奪う系のカードはそれなりにあるからね。
・・・サポート、ていうか効果を活かすためのカードもあるんだけど。

「猪口才な！　バトルだ、ゴヨウ・ガーディアンで、蒼い貴様に攻撃だ！」

今、思ったんだけど。
なんで普通に名前で呼ばないのかしら・・・。
敵役は主人公側の機体は、仇名（でいいのかな？）で呼ぶのが基本

なの？

ていうか主人公側って私は何言ってるんだ？

「リバース、オープン。くず鉄のかかし。攻撃を無効にし、再びセットする」

「そいつを待っていた。私は奪った羽根つきで、蒼い貴様に攻撃だ」

血迷ったのかしら。

攻撃力ならエクシアの方が上。

ここで仕掛けることに、なんの意味が・・・？

「攻撃力ならエクシアの方が上よ！」

「この瞬間、リバースカード、オープン。特殊迎撃部隊を発動。相手モンスターの攻撃力・守備力をエンドフェイズまで、自分フィールド上のモンスターの数×５００ポイントダウンさせる」

「・・・てことは」

「蒼いヤツの攻撃力は１０００ポイントダウンだ！」

ＧＮ－蒼穹の粒機兵

ＡＴＫ１９００→９００

まずっ、これが狙い・・・・！？

「破壊しろ！」

「させない！　手札のデュナメスの効果発動！　このカードを墓地に送り、戦闘を行うＧＮモンスターの攻撃力を１７００ポイントアップさせる・・・対象はもちろん、エクシア！」

ＧＮ－蒼穹の粒機兵
ＡＴＫ９００→２６００

「なに！」

竹虎
ＬＰ３２００→２１００
ｓｐｃ４→３

腰からビームサーベルを引き抜き、切りかかって来たキュリオスを右腕の大剣、ＧＮソードで弾き貫く。
キュリオスはそのまま爆散した。

・・・つかこれって、ソリッドビジョンだよね？
なんか火花散ってるんだけど。

「小癪な奴め。私はこのままターンエンドだ」

小癪と言われても負ける訳にはいかないんだから仕方ないじゃない。
勝って遊星をシティに送らないと・・・。

『遊奈！』

え？　このタイミングで通信する？
ていうか、向こうはパイプの中・・・よね？
しかもデュエル中だし・・・なんでこっちに通信を・・・？

『遊奈、どうやら今日に限って廃棄物処理施設で不都合があったようだ。お陰で遊奈も来れる。こっちに来てくれないか？』

あー、そういうこと。
今なら間に合うからついてこい、と。

良いかもね。
私もシティには興味あったし・・・。

一つ頷くと、そこに込めた意味を遊星は感じ取ったのか、遊星も頷き通信を切った。
切れたのを確認しないままスカイ・フライヤーの進行方向を反転させる。
行く先は処理場の中。

「待て、どこに行こうと言うのだ！」

「・・・流入が遅れるんでしょう？　なら私も遊星の後を追うだけよ」

「行かせると思うのか？」

「さっさと終わらせて、押し通るだけよ！　私のターン、ドロー」

遊奈
手札2→3
spc2→3

竹虎
spc3→4

くっ、あの子が来ない。
・・・このカードに賭けるしか、ないわ。

「自分のスピードカウンターが2つ以上あることで、私はこのカードを発動することができる・・・Sp－エンジェル・バトン！　2枚ドローし、手札から1枚墓地に送る」

遊奈
手札3→2→4→3

・・・・・・自然、笑みが浮かぶ。
この子を引くこの瞬間を、待ち望んでいた。

「自分フィールド上にＧＮモンスターが存在することで、チューナーモンスター、ＧＮ－原初の粒機兵（オーガンダム）を特殊召喚」

ＧＮ－原初の粒機兵
ＡＴＫ１０００

「なっ、チューナーだと！？　以前はコンタクト融合にしか使っていないはずだ！」

「別に宣言する必要なんてないじゃない」

「・・・！！」

馬鹿みたいな顔しちゃって。
別に詐欺とかじゃないんだし、そこまでこっちを睨む必要はないでしょ。

「さあ行くわよ。レベル４のＧＮ－明橙の可変機兵に、レベル２のＧＮ－原初の粒機兵をチューニング！」

背中のＧＮフェザーを展開させながら消えていくオーガンダム。
放出された粒子の残滓が、二輪の輪となる。
その輪の中にキュリオスが入る。
輪の中のキュリオスが消失し、代わりに四つの星が一列となる。

「夕焼けの翼が蒼天を翔る。新たなる力を存分に揮(ふる)え。シンクロ召喚。ＧＮ－明橙(ガンダムアリオス)の新可変兵！」

ＧＮ－明橙の新可変兵
ＡＴＫ２６００

輪を貫いた閃光の中から、オレンジ色の機兵が現れた。
現れた勢いそのままに一回転し、先端が鋭いシールドをゴヨウ・ガーディアンに突きつける。

「ふ、この場で出すからにはエース級かと思ったが、大した事はなさそうではないか。攻撃力が劣っているのに、何が出来る！」

「攻撃力しか見ていないのなら、あんた負けるわよ」

廃棄物を流し込むパイプのある区画までもう少し。
急がないとね。
とりあえず、さっさとこいつを倒さないとね。

「私はＧＮ－紫電の重機兵（ガンダムヴァーチェ）を通常召喚」

ＧＮ－紫電の重機兵
ＡＴＫ１８００

「そうか、まだ通常（それ）召喚が残っていたな・・・しかしそれで、どうするというのだ？！」

「そう慌てないでよ。このカードが最後の切り札！」

指差すのは、私の場に伏せられた一枚のリバースカード。
これは遊星と一緒にカードを拾っているときに見つけた。
二枚しか見つからなかったため、二人で一枚ずつにしたのはいい思い出だ。

「早速お披露目しましょうか。リバースカード、オープン。エンジェル・リフト」

「・・・まさか？！」

そう、蘇生させるのはもちろん・・・！

「エンジェル・リフトは墓地のレベル２以下のモンスターを特殊召喚する。私は墓地から、ＧＮ－原初の粒機兵を特殊召喚」

「もう一度シンクロか！？」

「そうよ・・・レベル４のＧＮ－紫電の重機兵にレベル２、ＧＮ－原初の粒機兵をチューニング」

再びＧＮフェザーを散らしながら消えるオーガンダム。
残った二つの輪に、勢い良く突っ込むヴァーチェ。

「紫電の稲妻が漆黒を裂く。新たなる力を存分に揮え。シンクロ召喚。ＧＮ－紫電（ガンダムセラヴィー）の重砲機兵！」

ＧＮ－紫電の重砲機兵
ＡＴＫ２６００

緑色の閃光から現れたのは、巨砲を携えた紫の機兵。
双肩にも大砲が在る。
ツインアイに光が走る。

「何度言わせる！　そんなものでは私のゴヨウ・ガーディアンには・・・」

「そっちこそ、何回言わせるの？　この子達の真骨頂は、その効果にこそあるのよ！」

百聞は一見に如かずと言うし、見せてやろうじゃない。
ソレスタルビーイングの真の力・・・！

ごめん、私ただの一般人だったわ。

「ＧＮ－明橙の新可変兵の効果を発動。自分フィールド上にＧＮモンスターが２体以上存在すれば、この子の元々の攻撃力は２９００になる！」

「馬鹿な、ゴヨウ・ガーディアンの攻撃力を超えてきただと・・・！？」

廃棄物を流すパイプの中に突入した。
本格的に急ぐ必要はないけれど、さっさと決めるにこした事は無いわ。

「アリオスでゴヨウ・ガーディアンに攻撃！　スピア・シールド！」

竹虎
ＬＰ２１００→２０００

アリオスの鋭いシールドが、ゴヨウ・ガーディアンの胸を貫いた。
その際の微かな衝撃で、竹虎の白バイ型のＤ－ホイールが揺れる。

「これでとどめっ！　セラヴィーでダイレクトアタック！　ＧＮバ

ズーカ・ハイパーバースト！」

「ぐ、ぐぉおおおお！！」

竹虎
ＬＰ２０００→０

セラヴィーから放たれた高濃度圧縮粒子を使用した砲撃が、竹虎を呑み込む。
攻撃の余波なのか、思い切り転倒した。

ぶっちゃけ、さっきのは・・・まあ、某魔法少女の〇ターライト・ブレイカーに見えなくも無い。
というか、彼からしたらトラウマ級の攻撃だろう。
自分でやっといてなんだが、彼には一応謝っておこう・・・心の中で。

『遊奈！』

「！　びっくりした・・・どうしたの、遊星？」

『今すぐ引き返すんだ！』

どーゆーこと？
別になんともないんだけど・・・。

『俺はなんとかシティには入ることには成功した・・・だが、今になって廃棄物の流入が始まった。早く引き返すんだ！』

「・・・・・・あ」

『どうしたんだ？』

あー、あれか。
目の前には、さっきまではなんか気づかなかったけど、物凄い量の廃棄物が流れてきた。
今、私は、自分の死に場所を知った。

ていうか、マジでこれ、私死ぬんじゃない？
正直、こんなんに呑み込まれて生きていられる訳ないじゃん。

※牛尾さんは普通に生きてました。

なんか、今電波的なものを受信したわ。
それはさておいて、とりあえず言っとこうかしら。

「・・・遊星」

『なんだ？』

「ジャックの目を覚ましてあげなさい。あんたなら・・・それが出来るわ」

『遊奈？　何故、そんな言い方なんだ？』

遊星の声が震えている。遊星の顔が、どことなく悲痛に歪んでいる。
・・・いや、私の気のせいね。
だけど私は気に留めない。
覚悟が・・・揺らぐから・・・。

「そんな言い方って？」

『何故、そんな自分で見ようとしないかのような言い方なんだ？』

「決まってるじゃない。あんたなら、きっと出来るからよ」

きっぱりと、これ以上ないってくらい信用と信頼を乗せた言葉。
あと、その他諸々も乗っている気がするけど・・・一番込めたのは
今の二つ。

廃棄物が迫ってきている。
最期に言えるのは、たった一言。

「どこでもあんたの傍に居てあげる・・・遊星」

『ゆ、遊奈ーーーーー！！』

遊星の叫びを聞きながら、私は廃棄物に呑まれた。

・・・遊星・・・。

五話『駆け抜ける遊星！想いは共に』（後書き）

遊奈「・・・・・・」

おや、どうしたのかね？

遊奈「いや、これ私おもくそ死んでない？」

さあー、どうでしょうねー？

遊奈「怪しい。めっちゃ怪しい」

ＨＡＨＡＨＡ、なんのことやら。

あなたには次回に満足さんの憂鬱を晴らしてもらいますよ。

遊奈「はぁ？　どういう意味よ？」

そういえば原作知識ないって設定でしたね。

どうでもいいですけど。

まあ次回のヒントというなら、ダークです。

遊奈「ヒントがダーク？　そして京介の憂鬱？　どういうことだ、クアンタ。まるで意味が分からんぞ！」

ネタに走りましたね。

そろそろ次回予告、行きましょうか。

遊奈「あ、今日は優しい・・・んんっ、えー、廃棄物に呑まれてしまった私。目を覚ましてみれば、そこは見覚えの無い場所で。いき

なり声をかけられ振り向けば、そこに居たのは・・・！」

次回、遊戯王５Ｄ，ｓ　転生者です、ごきげんよう。
第六話『怒れる鬼柳　救いだせ、ダブルオー！』

それではみなさま。

遊奈「次回まで、ごきげんよう！」

遊奈「なんで今回は優しかったの？」

死んでるから。

遊奈「・・・・・・・え？」

六話『闇の戦い　瀬川遊奈ＶＳ鬼柳京介　《前編》』（前書き）

えー、一言。

予告詐欺、第一弾っ・・・！

といってもタイトルだけ詐欺なんですが。

それと本編中の鬼柳さんですが、使用するカードがアニメ版と比べてけっこう違っています。一応、インフェルニティもあるよ・・・（汗。

その理由については、まあ遊奈が本編中で言ってくれてます。

とりあえず後は一言だけ。

ゆっくりしていってね！

六話『闇の戦い　瀬川遊奈ＶＳ鬼柳京介　《前編》』

一人の青年が佇んでいる。
その姿に覇気はない。

どこか虚ろな目をしている。
その少年を、遊奈は知っている。
今はセキュリティによって収容所にいると聞いていたのだが、これはどういうことなのかと、遊奈は首を傾げた。

遊奈は、彼に手を伸ばそうとするが、見えない壁によって動きが取れなくなった。
何事かと周りを見るが、一切の邪魔などない。
しかし事実として、彼女は身動き一つ、満足に出来ない。

眼前で彼女の知己である青年ーーー鬼柳京介は、何事か呟いている。
遊奈はそれを聞き逃すまいと、耳を傾けた。

「復・・・した・・・る。そして・・・った、チー・・・のラスト・・・ルを」

聞き取れたのは、これくらいだった。
如何せん、距離があった。
だがこれほど聞けたなら、ある程度予想できる。

なのに、予想は、所詮は予想でしかない。
彼女は・・・何も出来ない。

彼に歩み寄ることすらできないのだから。

悔しくて、ただ彼に近づく・・・そんな些細なことすら出来ない自分に腹が立って、下唇を噛み締める。

唐突に・・・頭上から光が降ってきた。

遊奈を迎えるかのように燦々と輝くそれは・・・まるで地獄の底で途方に暮れていたカンダタのもとに垂れてきた蜘蛛の糸のようで・・・。

だから遊奈が、それに向かって手を伸ばしたのは・・・必然だったのだろうか。

一瞬の眩しさの後、浮遊感が遊奈の体を包み、意識が再び落ちた。

意識が無くなる直前、遊奈は鬼柳と目が合ったような気がしたが・・・彼女はそれをはっきりと理解しないまま、目を閉じた。

※※※

目を覚ますと、そこは薄暗い部屋だった。

中世の貴族・・・と言わずとも、金持ちの屋敷の食堂のような部屋だ。

遊奈は、どうやら部屋に持ち込まれたのだろう長椅子の上で目を覚ました。

上体を起こすと、奥の方にこちらに背を向けている男たちの姿が見えた。

遊奈が起きたのを感じたのか、奥の方でたむろしていた三人が、遊奈へと振り返った。

「目覚めたか、四人目のダークシグナーよ」

初めに口を開いたのは、真ん中の長身で、色素が抜け落ちたような白髪の男だった。
他の二人はフードを深く被っているため、顔が見えない。

「・・・ダークシグナーってなに？」

今まで聞いたこともない呼ばれ方に頭に？マークを浮かべて問う遊奈。
・・・とはいえ前世では、その呼び方をされる人物がどういった存在なのか、彼女は知っているのだが。

「そうだな、説明をしようか。まずダークシグナーというのは５００年周期で、憎き赤き竜の手先であるシグナーと戦う存在のことだ。そして我らは死の神によって、邪神の代わりに戦うことで仮初めの命を得ている。ここまでは理解したな？」

状況をあまり理解していない遊奈に対して、長身の男ーールドガーは分かりやすく説明をした。
遊奈はルドガーは、見た目そのままの人物ではないと判断した。
だが、遊奈は、彼のことはまだ知らない。
どうやら言動や感じる風格を鑑みるに、おそらく彼がダークシグナ

ーのリーダー格なのだろうと当たりをつけた。
そしてそれは外れてはいない。

「とりあえずは、まあ理解したわ。けど今私たちがダークシグナーとして存在するということは、つまりはその５０００年周期の戦いが、もう始まると言うのかしら？」

「ふむ、なかなかに聡明だな。鬼柳が味方にいて役に立つと言うのも、頷けるというものだ」

「えっ！　京介もダークシグナーなの！？」

ルドガーの言葉に、驚愕を禁じ得ないといった様子で瞠目する遊奈。ルドガーの横に立つ男が、愉快そうに肩を震わせながらフードをはずす。
その顔は紛れもなく、かつての友であり。
だが今は、かつて見たことがない、怒りに顔が歪んでいた。

「くくっ、そうだ遊奈。お前たちの保身のためにセキュリティに売られた、哀れな男がダークシグナーとなって蘇ったのさ！」

「ま、待って京介！　あれは誤解なの！」

「はっ、誤解ねぇ。それも俺を売るために学んだ言葉の選び方か？
だが、もうそんなもんで騙される俺じゃねぇぞ」

「だから誤解なんだって！　私の話を聞いてよ、京介！」

自分をセキュリティに売った（と鬼柳は思い込んでいる）あの時のメンバーの一人である遊奈を前にして、激情を抑えきれずにいる鬼柳。
そしてその鬼柳の誤解を解こうと、悲痛とさえ言える声色で必死に説得しようとする遊奈。
互いに視線は交差しているが、その想いはまるで正反対なものだった。

「・・・ルドガー。こいつに先輩として、ダークシグナー流の戦い方を教えるが・・・構わないよな？」

「・・・・・・好きにするがいい」

「！」

鬼柳の問いをあっさりと承諾するルドガー。
おそらくはここで、真に使えるか否かを見極めるのだろう。

やってやろうではないかと遊奈は腹をくくる。
自分は不本意ながらサテライトの姫などと呼ばれていた。
ならば、サテライトの出身者に勝てない道理などないだろう。
なぜなら彼女は、その称号に足る実力を持っているのだから。

「なら、始めようか、遊奈ぁ！　闇のデュエルをなぁ！」

宣言とともに遊奈と鬼柳を中心に、円状に紫色の炎が迸る。
まるで牢獄のように、二人を閉じ込める檻のように、ごうごうと燃え立つ。

「・・・京介、あんたに勝てばいいのね？」

「勝てるもんならな、裏切り者ぉ！」

「「・・・決闘（デュエル）！」」

遊奈
ＬＰ４０００
手札５

鬼柳
ＬＰ４０００
手札５

このデュエルで、まずは京介の目を覚まさせるしかないわ。
手っ取り早く話を聞かせるには、このデュエルに勝つしかない！

遊奈
手札５→６

「私の先攻、ドロー！」

この子たちじゃ、あの京介には届かない。
一気にいけないのは、歯がゆいな。

「ＧＮ－紫電の重機兵を攻撃表示で召喚」

遊奈
手札６→５
ＧＮ－紫電の重機兵
ＡＴＫ１８００

この子なら、ある程度は保つわ。
・・・本当はエクシアがいいんだけども。

「カードを三枚伏せて、ターンエンド」

遊奈
手札５→２

「はっ、自分を守る準備だけはいいんだな、遊奈よぉ！」

「そんなことはっ」

「俺のターン、ドロー」

鬼柳
手札６→５

話、聞いてよ・・・。
どうして・・・そんな冷たい目なの。

「インフェルニティ・ビーストを攻撃表示で召喚し、カードを二枚伏せてターンエンド」

鬼柳
手札６→３
インフェルニティ・ビースト
ＡＴＫ１６００

インフェルニティ・・・それが京介の新たな力。
効果は、それほど覚えてはいない。
そして、込められた思いも分からない。
ただひとつ分かるのは、このデュエル・・・負けられない！

「私のターン・・・ドロー！」

遊奈
手札２→３

・・・来ない。
いや、いつまでもあの子に頼ってちゃダメよね。

ここは私のプレイングで、上手く動かさないと。

「私はＧＮ－明橙の可変機兵を守備表示で召喚」

遊奈
手札３→２
ＧＮ－明橙の可変機兵
ＤＥＦ１２００

守りはこれくらいかな。
あとはリバースカードをどのタイミングで、どう使うか。
少しでもミスしたら、痛いしっぺ返しを食らう。
京介は、それほどの強敵だから・・・。

「ヴァーチェで、インフェルニティ・ビーストに攻撃！」

「リバースオープン！　永続罠、デプス・アミュレットォ！」

「カウンター罠、発動！　戦術予報士の読み！」

確かあの罠は手札を一枚捨てて攻撃を無効にする罠だったはず。
あれはここで倒しておかないと・・・私の勘が、警告してきている。

「このカードは自分フィールド上にＧＮモンスターが居るときに発動できる。相手の魔法・罠の発動を無効にして破壊する！　さあ、

コストとして手札一枚を捨てなさい」

「ちっ」

鬼柳
ＬＰ４０００→３８００
手札３→２

「くくっ、今使ってよかったのかよ？」

「・・・その子は倒しておいた方が、いいと判断したからね」

「ふん、そうかよ俺のターンだ、ドロー」

鬼柳
手札２→３

「インフェルニティ・リローダーを攻撃表示で召喚。さらに魔法カード、強制転移を発動」

鬼柳
手札３→１
インフェルニティ・リローダー
ＡＴＫ９００
あっるぇー？

なんでこんなガチカードを京介が・・・。
って最初に会った時に渡してたような。
ということは、今もまだ私との絆は・・・残っているの？

「私はキュリオスを選択するわ」

「どうだ遊奈。仲間を、むざむざと敵に引き渡す気分はよ！」

「・・・生憎と、私は敵に渡したなんて思っていないし、むしろそれは悪手よ、京介」

そう、キュリオスは敵陣についてこそ痛みがあるカード。
それを教えてあげる。
あの、分からず屋の頭デッカチに。

「そしてキュリオスのモンスター効果発動！　このカードのコントロールが相手に渡った時、相手ライフに８００ポイントのダメージを与える」

「ぐおぉぉ・・・！」

鬼柳
ＬＰ３８００→３０００
このデュエル・・・もしかしたら、ダメージが現実になっているの！？

「京介！」

「来るんじゃねえよ、裏切り者が・・・コントロールが変わった時に発動する効果か。まさしく仲間を売る貴様らに相応しいカードだな！」

・・・ら？
もしかして京介は、私だけでなく遊星たちにも、その憎しみを向けているの？
・・・なら、やっぱりここで止めないと。
京介と遊星たちが、こんなことをするのは見逃せない・・・自分勝手と言われようと、これは譲れない！

「京介・・・もう、言葉で分かってとは言わない。ここまで来たら、デュエルで話を聞かせる！」

「強行手段かよ。だが、それが一番分かりやすいよなあ！」

京介は、さっきのダメージをものともせずに、立っている。
・・・どこかそれが、意地を張っているように見えたのは、きっと気のせいなのだろう。

「魔法カード、早すぎた埋葬を発動。ライフを８００払い、墓地のインフェルニティ・デーモンを特殊召喚する」

鬼柳
手札１→０
ＬＰ３０００→２２００
インフェルニティ・デーモン
ＡＴＫ１８００

また・・・！
あれらのカードを持ってるってことは、まだ希望はあるわ。
強制転移も、早すぎた埋葬も、私が交換したカード・・・！

だけど・・・違和感がある・・・。
本来なら、入れるはずの無いカード。
なのに、無理やり入れたみたいな感じ。

「インフェルニティ・デーモンの効果発動。手札が０の時にこいつが特殊召喚された時、デッキからインフェルニティと名のつくカードを手札に加える・・・俺は、インフェルニティ・ドワーフを手札に加えるぜ」

鬼柳
手札０→１

・・・ガンじゃなくて、ドワーフ？
まだ持っていないか、それともまた別の思惑があって・・・？

「てめえのモンスターで、インフェルニティ・リローダーに攻撃」

ＧＮ－明橙の可変機兵
ＡＴＫ１５００

「あぁぁぁっ！」

遊奈
ＬＰ４０００→３４００

痛ぅ・・・これが、闇のデュエル。
半端じゃなく痛い・・・！

「ターンエンドだ」

「ぅ・・・私のターン・・・ドロー」

遊奈
手札２→３

まだ６００しかライフは減っていないのに、これほどの衝撃。
危険だわ・・・お互いにとっても・・・。

「私はヴァーチェで、キュリオスに攻撃」

「ぐおぉぉ・・・」

鬼柳
ＬＰ２２００→１９００

よし、僅かにだけどライフを削れている・・・！
このまま地道に押していけば、勝てる。

「私はこのままターンを終了するわ」

「俺のターン、ドロー」

鬼柳
手札１→２

「・・・くくくく、ひゃーはっはっはっはぁ！！」

「・・・何を笑っているの？」

「いやぁ、ここでこいつを引くとは思ってもいなくてよぉ。覚悟しろよ、遊奈？」

直感で理解した。
まずい、と。

何かを出す気だが、確実に京介はこの状況を打開するためのキーカードを出すつもりだ。
インフェルニティを使うに当たってはシンクロが基本だ。
なのにチューナーなどいない。
つまり・・・切り札は上級モンスター？

「リバースカード、オープン！　リビングデッドの呼び声！　墓地のモンスターを特殊召喚する！」

また私が渡したカード・・・！
なぜ京介はこうも私と繋がりがあるカードを使うの？
憎んでいるはずなのに・・・。

「俺はインフェルニティ・ネクロマンサーを特殊召喚。そしてインフェルニティ・デーモンと、インフェルニティ・ネクロマンサーをリリースし、ＤＴ　ナイトメア・ハンドを召喚！」

鬼柳
手札２→１
ＤＴ　ナイトメア・ハンド
ＡＴＫ０

ダーク・・・チューナー・・・？
なにそれ、聞いたこと無いわ。
しかも、攻撃力が０でどうするの？

「ＤＴ　ナイトメア・ハンドが召喚された時、手札からレベル２以下のモンスターを特殊召喚できる。来い、インフェルニティ・ドワーフ！」

鬼柳
手札１→０
インフェルニティ・ドワーフ
ＡＴＫ８００

「レベル２のインフェルニティ・ドワーフに、レベル１０のＤＴナイトメア・ハンドをダークチューニング！」

「ダークチューニング！？」

なにそれ、今まで聞いたことも無いわ。
しかも・・・ドワーフの中に星が埋まった・・・。

「漆黒の帳下りし時、冥府の瞳は開かれる。舞い降りろ闇よ！　ダークシンクロ！　いでよ、ワンハドレッド・アイ・ドラゴン！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン
ＡＴＫ３０００

「・・・でかい」

闇を思わせる漆黒の楕円から現れたのは、ドラゴンというよりかは悪魔と形容した方がむしろ相応しいと言えるほどに、禍々しい存在だった。
その威圧感は、まさしくこの巨体から発せられるほどに圧倒的だった。

「ひゃはははぁ！　これでてめえの命も風前の灯ってやつだなぁ！」

「待て鬼柳、そいつは殺すな。我らの同胞なのだぞ」

「消えちまいな、遊奈。ワンハドレッド・アイ・ドラゴンで、そのデカブツに攻撃だ。インフィニティ・サイト・ストリーム！」

「鬼柳・・・！　・・・聞こえていないのか？」

攻撃表示にしているヴァーチェにではなく、リローダーに？
・・・けど、京介が無駄なことをするわけがない・・・！
きっと、なにかある。
あと、ルドガーがなにか言ってるけど・・・なにかしら？

「やらせない！　速攻魔法発動、月の書！」

「この瞬間、ワンハドレッド・アイ・ドラゴンの効果発動。墓地の

闇属性モンスターの効果を得る。俺が選択するのはインフェルニティ・ビースト！」

確か、ビーストの効果は手札が０の時、このカードが攻撃をする時に相手は魔法・罠を発動出来なくなる効果。
つまり・・・。

「月の書は、発動できない・・・！」

「吹き飛べ！」

「きゃあああぁぁぁ！！」

遊奈
ＬＰ３４００→２２００

くぅ・・・。
痛ぁ・・・立とうとしても、立てない。
全身には鈍痛が走って、視界がぼやける。
背中の方では、紫の炎が燃え続けてる。

「どうした。立てよ。立って、無様なダンスでも踊り続けろよ、遊奈」

「ダンスは、好きだけど・・・無様なダンスは・・・嫌いだわ」

ゆっくり立ち上がる。
痛い、けどのんびり座ってもいられない。
だってこの頭デッカチに、本当の事を教えてあげないといけないから。

「・・・ふん、ターンエンド」

京介が鼻で笑ってるけど、どこか無理してるように見えるのは、気のせいかな。
・・・それにこんな京介は見たくない。
だから私は・・・勝ってみせる。

「私のターン、ドロー！」

引いたカードを横目で見ながら、私は不敵に笑った。

六話『闇の戦い　瀬川遊奈ＶＳ鬼柳京介　《前編》』（後書き）

妙なところで切りましたが、他に切りようが無かったので勘弁してくださいね。

次回についてですが、遊奈の新たな切り札で決着をつけます。
楽しみにしててください。

次回、七話『闇の戦い　瀬川遊奈ＶＳ鬼柳京介　《後編》』
デュエル、スタンバイ！

正直ここから勝てる気がしないのは・・・私だけでしょうか？

七話『闇の戦い　瀬川遊奈ＶＳ鬼柳京介　《後編》』（前書き）

予告どおり、今回は遊奈の新たなエースが登場です。
・・・・・・ライザーじゃないよ？

それと今回をもって（今更）、原作が崩壊しそうです。
個人的には今回みたいな展開は悪くないと思います。
・・・個人的には。

あとダークシンクロモンスターどうしよ。
金色便器でいいかな・・・。

七話『闇の戦い　瀬川遊奈ＶＳ鬼柳京介　《後編》』

「京介・・・私のエースを見せてあげる」

遊奈
ＬＰ２２００
手札４

「おもしれえ。見せてみろよ」

鬼柳
ＬＰ１９００
手札０

そんなに見たいなら見せてあげる。
私のエースを！

「まずはＧＮ－蒼穹の粒機兵を召喚。そして私のフィールド上にＧＮモンスターがいることで、ＧＮ－原初の粒機兵を特殊召喚！」

遊奈
手札４→２
ＧＮ－蒼穹の粒機兵

ＡＴＫ１９００
ＧＮ－原初の粒機兵
ＡＴＫ１０００

「その２体で、どうやってワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに勝つ気だ？」

「そう急かさないで・・・私はこの２体をデッキに戻す！」

「デッキに？　コンタクト融合か？！」

「そうよ・・・二つの想いが束ねられた時、新たな剣が舞い降りる。コンタクト融合！　来て、ＧＮ－蒼穹の双粒機兵！」

ＧＮ－蒼穹の双粒機兵
ＡＴＫ２４００

・・・でもこの子だけじゃあ勝てない。
効果で破壊すれば、そのまま勝てる。
けど・・・それじゃあ駄目。
闇のデュエルは・・・確か、敗者に死を齎（もたら）したはず。
つまりこの状態から勝ったら、京介は・・・。

「どうした、それで終わりか？　・・・それともこのデュエルで、俺が負けた時のことでも考えてんのか？」

「！」

「なに驚いてんだ？　貴様らのように甘い人間の考えていることなど、お見通しなんだよ！」

ここから、どうすれば・・・。

・・・今は、この伏せカードに賭けるしかない！

「リバースカード、オープン！　イオリアの望み！」

「あぁん？」

「このカードは自分フィールド上の、ＧＮモンスター１体につき、私はデッキから１枚ドローできる。その後、私はドローした枚数×３００ポイントのダメージを受ける」

「おいおい、どんなマゾカードだぁ？　そこまでしねえと駄目なくらい、詰まってんのかよ？」

「私のフィールドには、ダブルオー１体。よって１枚ドローするわ」

遊奈
手札２→３

・・・！

このカード。期待通り・・・！

「ドローしたはいいが、３００ポイントのダメージを受けてもらうぜ」

「うぐぅぅ・・・」

遊奈
ＬＰ２２００→１９００

京介と、ライフが並んだ。
・・・ここで決めたい・・・決められる。
けれど・・・このままじゃあ・・・。

京介の気持ちは分からなくも無い。
けど・・・誤解ということを教えたい。

私には、ミカエルから貰った力があるのに、どうしようも出来ない・・・。
ていうか、それ不良品とかじゃないわよね？
こんな時に発揮しなくて、どうすんのよ。

こんな時くらい、力を貸しなさいよ・・・！

「・・・あぁ？　なんだその腕の光？」

「え？　・・・なにこれ？」

見れば緑色に光る輪っか？が右腕に在った。
なにこれ？
もしかして、これがミカエルの言っていた主人公たちに劣らないほどの力？
でも・・・。

「光ってるだけじゃない・・・」

「くくく、面白えもんを見せてくれるじゃねえか。それで・・・終わりかよ？」

「まだよ！　何回言っても聞かないあんたに・・・誤解だって聞かせるまでは、終わりじゃないわよ！」

そう啖呵を切った瞬間、デッキ・・・ていうかデュエルディスクが緑色の輝いた。
私は、何事ー！？と騒いでいるのだが、炎の檻の向こうーーー外の方で、ルドガーが眉を顰(ひそ)めていた。
その視線を気にしながらも、不思議と私は落ち着いてきた。

脳裏にカードが浮かび上がってきた。
それも複数。

浮かび上がるのは、ダブルオーと、再び手札に舞い込んだオーガンダム。
そして、もう一枚のカード。その裏側。
それを辿るように、電流が迸る。

それは勝利の方程式だと感じた。

「私のフィールドにＧＮモンスターがいることで、チューナーモンスター、ＧＮ－原初の粒機兵を特殊召喚！」

遊奈
手札３→２

「馬鹿な！　また引いたってのか！？　しかもあえてチューナーと宣言するだと！」

「いくよ・・・レベル６のＧＮ－蒼穹の双粒機兵に、レベル２のＧＮ－原初の粒機兵をチューニング！」

オーガンダムがＧＮフェザーを展開しながら消えていく。
残った二輪の輪にダブルオーが入っていく。
自分に上から降ってくるＧＮ粒子を、見るともなく見ながら、シンクロ口上を口にする。

「束ねられし想いが、今ここに集う。七天の剣よ、舞え！　シンクロ召喚！　ＧＮ－七剣（ダブルオー・セブンソード）の双粒機兵！」

ＧＮ－七剣の双粒機兵
ＡＴＫ２８００

私の目の前に・・・七つの剣を携えた機兵が舞い降りた。
両手の剣はそれぞれ長い剣、短い剣と分かれた。
後ろ腰には変わらずビームサーベルが二本。
両側のふくらはぎに増設されたハードポイントに一本ずつ短い刀剣が懸架されている。
そして一番に目を引くのは、左肩のコーンスラスターにマウントされた巨大な剣だ。

「シンクロ・・・だと・・・？」

「ダークシグナーになったからって、シンクロしてはいけないのかしら？　そしてセブンソードの効果で、このカードの攻撃力は墓地のＧＮモンスター１体につき１００ポイントアップする！」

ＧＮ－七剣の双粒機兵
ＡＴＫ２８００→３２００

「なに！？　ワンハンドレッド・アイを、超えてきた！？」

「さらにここで、セブンソードの効果を発動！　１ターンに１度、手札のモンスターを墓地に送り、１枚ドローする」

けっこう良い効果だけど・・・その分の対価も、ある。

「私はＧＮ－赤ハロを墓地に送り、ドローするわ・・・そして私はこの効果を発動した次のターンのドローフェイズをスキップしなければならない」

遊奈
手札２→１→２

「ふん、だがこれじゃあまだ俺のライフを削りきれねえぜ」

「さっき墓地に送ったのはＧＮモンスター・・・だからまだ攻撃力は上がるわ」

ＧＮ－七剣の双粒機兵
ＡＴＫ３２００→３３００

・・・でも、ここまで来ると、もはや憑いてるレベルだわ。
この子が来てくれたお陰で私は勝つ。
・・・やっぱり、勝つしかないわ。

「バトル！　セブンソードで、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに攻撃！」

「たかが３００！　次があるぜ！？」

「・・・ううん、ここで終わり。手札のデュナメスの効果を発動。ＧＮモンスターが戦闘を行う場合、このカードを墓地に送ることで、

戦闘を行うモンスターの攻撃力は・・・１６００ポイントアップする」

ＧＮ－七剣の双粒機兵
ＡＴＫ３３００→４９００

「超えているのは３００・・・そこに１６００が来るって事はぁ・・・！」

「そう・・・０、よ・・・」

セブンソードが、左肩にマウントしたＧＮバスターソード?を両手で構える。
ツインアイは、揺らぐことなく京介を見据えている。
私の視界にいてる京介は、なぜか揺らいでいる。
・・・いったい何時の間に、そんな技を覚えたのだろう。

「行って、セブンソード！　バスタァァァ・ブレイドォォ！！」

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

鬼柳
ＬＰ１９００→０

勝利した。

あの京介との、本気のデュエルで・・・。
しかし・・・勝利の余韻に浸らせてくれないのか・・・。
ふと京介の方を向いた瞬間、視界が緑色に塗りつぶされた・・・。

※※※

ここは、どこだろう・・・。
辺り一面が光り輝いている。

けれど・・・眩しくない・・・。
むしろ温かくて、心が温もるようで・・・。
今なら誰とでも、分かり合えそうだ。

ふと、気づいた。
なぜか、今の私は裸だ。
どういうことだろうか？

「・・・遊奈」

「京介・・・その目・・・」

ふと気づくと、近くに京介がいた。
もちろん、京介も裸だ。
けれど、さっきとは違うのはそれだけじゃない・・・。
彼が纏う雰囲気そのものが・・・さっきとはまるで違う。

それを如実に示すのが、優しげな目だ。
さっきの怒りと憎悪に満ち満ちた黒い眼ではなく、昔の仲間こそが第一だと言っていた澄んだ眼だ。

「遊奈・・・今まで悪かったな。あと、誤解していた・・・」

「え？　ていうか、どうして納得したの？」

自分で完結してくれるなら、それにこしたことはないのだが、どうもあっさり過ぎて逆に落ち着かない。
一体・・・どうして・・・？

「ここに来たとき、お前の記憶が俺の中に、流れ込んできた。その中に、あのセキュリティの奴もいた」

あの、というと遊星が名乗り出た時に居てた偉そうなセキュリティのことかしら？

「ああ、あの時のことは俺から見ても、遊星はあいつを睨んでいた。なのに俺はあいつを、あいつらを信用していなかったんだ・・・散々仲間だって言ってたのに、情けねえ。こんなんじゃあ、あいつらに会っても、きっと満足できねえぜ・・・」

「大丈夫だよ、京介。きっと大丈夫。遊星は・・・遊星だけじゃない、きっとみんな、京介のこと分かってくれるよ」

「そうか？　・・・いや俺が信じねえと、誰も信じてくれねえか・・・ありがとうな、遊奈」

うんうん、京介に笑顔が戻ってくれて嬉しいわ。
これでも十年の付き合いのある仲間だしね！

「遊奈・・・お前はダークシグナーとして以外にも、力があるみてえだ。そのお陰で闇の力に飲まれないで済んでいるのかもしれない。けど、気をつけろよ。何時何があるか分からないんだからよ」

「うん！」

・・・あ、光が消えていく。
この不思議空間が、消えていくんだ。
・・・今気づいたけど、ここってダブルオーの裸空間じゃない！？
・・・・・・なんでさ。

※※※

気がつくと私は突っ立っていた。
目の前には倒れている京介・・・って！

「京介！　大丈夫！？」

「ああ・・・俺はここで終わりだが、最期に会えたのがかつての仲間のお前で良かったぜ」

「ど、どういうこと・・・？」

「闇のデュエルに敗北したものは、消え去るのが定めなのだ」

「ルドガー・・・！」

振り返れば、相変わらずに威風堂々とした出で立ちのルドガー。
発言からして、大物って感じだけど・・・きっと何か知ってるわね・・・！？

「ルドガー、京介を助けられないの？　今にも・・・消えそうで、どうすればいいの・・・！？」

「ふむ・・・ならばお前の命を差し出すといい」

・・・は？
命を、差し出せ・・・？

なにそのいかにも悪役って感じの台詞。
・・・いいじゃないの。
乗ってやろうじゃないの。

「いいわ、私の命で京介が救われるなら・・・。それでどうするのよ・・・！」

「そう慌てるな。まず始めにお前は死んでいると言ったが、正確にはお前はまだ死んでいない。おそらくはその緑色の痣が、なにかしているのだろう・・・今のお前は仮死状態であるというのが、正しいな」

仮死状態・・・けど、なら私はどうして動いているのかしらね。
ますます謎が増したわ。

「そこで、だ・・・お前は本当の死を受け入れ、完全なるダークシグナーとなることで、鬼柳に命を与えるのだ・・・私は、これについてなんら嘘はついていないぞ？」

「・・・・・いいわ、完全にダークシグナーとなることを、受け入れるわ」

「ほう、度胸のある奴だ・・・ならば覚悟しろ、瀬川遊奈よ」

ルドガーが懐から、銃を取り出す。
なんでそんな物騒なもんを持ってる、とかいう突っ込みはなしにしておこう。

今は、京介さえ助かれば、それでいい。

「遊奈・・・やめろ。そんなことされて、俺が、満足できると思ってんのか！」

「あんたの満足なんて、私は知らないわ！　ありがたく私の命を受け取れ！」

「さらばだ、瀬川遊奈よ」

轟音とともに私の額を、銃弾が貫いていく。
即死のはずなのに、ゆらりゆらりと視界が後ろに流れていくのが解る。

視界の端で、黒く染まり消えていく途中だった京介の体が、緑色の粒子に包まれそのまま消えていった。
恐らくは、勘だが遊星のもとに行ったに違いない。
きっとそうだといいな。

最後に見えた京介の口の動きから、判断する。
あの時私は、馬鹿野郎と言われたのね。

馬鹿でいい。
私は仲間のためなら・・・馬鹿にだってなんにだってなれる。
そう、思いながら・・・私の意識は闇に沈んだ。

七話『闇の戦い　瀬川遊奈ＶＳ鬼柳京介　《後編》』（後書き）

遊奈「二回目だわ・・・死ぬの・・・」

まあまあ、ある意味でレアですよ。
こんな早くからこんなに死ぬ主人公は。

遊奈「嬉しくない！　凪なんて全く死にそうに無いのに、なんでこっちはこんなに死んでるのよ」

凪「呼んだ？」

遊奈「呼んでない！　帰れ！」

凪「はいはーい」

・・・何時の間に乱入する術を・・・（汗。

遊奈「とりあえず京介は無事なのね？」

そうっすよー。
あと今回の君、ご都合主義にも程があるでしょ。

遊奈「うっ、作者のあんたが言うか！」

私はご都合主義ばっちこーいな奴なんで・・・。

遊奈「むかつく！　・・・次回、八話『巨人の痣を持つ女』・・・ライディングデュエル、アクセラレーション！」

遊奈「そういえばルドガーの横に居たのって誰？」

ディマクェ・・・。

八話『巨人の地上絵の痣を持つ女』（前書き）

はーい、遅くなってすみません。
今回はＶＳ遊星です。
アニメでいうなら、３３話～３５話と思ってくださって構いません。

嘘です！
鬼柳さんとうちの遊奈を入れ替えただけです！

今回はデュエルに量取られまくりでした。
なんせ一万文字超えましたから。

・・・まさか遊戯王で一万超えると思いませんでしたよ。
では、どうぞ。

八話『巨人の地上絵の痣を持つ女』

目覚めた時、私が居たのは見知らぬ・・・いや若干知っている薄暗い部屋だった。
あれ、なんかデジャヴ・・・。

「目覚めたか、瀬川よ」

「ルドガー・・・私は・・・」

「鏡を見ろ」

鏡・・・近くにあったそれを見ると、私は驚愕した。
なぜなら、私の目が黒くなっていたから。
正確に言うのならば、白目の部分が、だろう。

「・・・これが完全にダークシグナーとなった証ね？」

「そうだ。あの奇妙な痣の抵抗も、今はない。お前は自分の死を受け入れたことで、ダークシグナーへと生まれ変わったのだ」

ダーク・・・シグナー・・・。
主人公でもある遊星はシグナーで、旧知の仲である私は敵のダークシグナー。
皮肉ね・・・それを言うなら、あの京介もそうだけど・・・。

とりあえず今はどうしましょうか。
私の中の地縛神は、サテライトに向かっているシグナーと戦えと言ってるけど・・・。

「一体、誰が来るのかしらね？」

「ふ、ここに向かっているのは不動遊星だ・・・不動博士の息子を直に見たいが、ここはお前に譲ろう。体が疼いているのだろう？」

そう、遊星という名前が出た瞬間、私の感情の奥にあるものが反応した。
それは宿命のようで、運命のようで、あるいは必然だったかもしれない。
遊星との、戦い（デュエル）。

それを今か今かと待ち望む私がいるというのは、紛れも無い事実だった。

「・・・乗ったわ、私が行く。遊星と戦うのは、私」

「奴がいるのは・・・ここだな」

そう言って、地図を指差すルドガー。
案外近いことに笑う。
きっとその笑いの中には、様々な意味があったはずだが私には分か

らない。
少なくとも、今の私には。

※※※

「見つけた」

ついさっきまでクロウと一緒にセキュリティと遊んでいた遊星を見つける。
ここ数週間ほどしか離れていないが、相変わらず仲間との絆を大事にしているようで安心した。
そうじゃなければ倒しても面白くないから。

右腕を掲げる。
そこにあるのはガチャピ・・・巨人の地上絵の痣。
それに意識を集中すると、辺りに暗い霧のようなものが出始める。
霧が集まり、ガチャ・・・巨人の形の靄(もや)が遊星たちの進行方向・・・
つまり私の近くに出来る。

さて、もう少しでしょう。
ようやくお遊びではなく、正真正銘のシグナーと、ダークシグナーの戦いが始まる。

・・・来たわね遊星。

「ふっ」

カードを遊星とクロウが乗るDホイールの近くの岩に投げる。
それは綺麗な軌跡を描いて、カッという小気味いい音と共に突き刺さる。

「あ？　っておい、遊星！　このカードは！」

「奇跡の代行者ジュピター・・・！　お前は誰だ！？」

二人揃ってこっちを見る。
今の私はローブを被り、フードで顔を隠している。
そのせいか、二人からはただの不審者にしか見えていないのだろう。

だが。
遊星は、どこか信じたくないといった顔だ。
当然だろう。
ジュピターは遊星が私のデュエルを見学していた時に、ほぼ毎回使っていたカード。
嫌でも思い出す。

それでも一縷の望みに懸けているのだろう。
残念ながら、それは叶わないけどね。

「誰だって？　それは酷いわね。私のことを、忘れるなんてね！」

バサァッと、勢い良くロープを脱ぎ捨てる。
そのままガラクタの山に引っかかる。

そうそう言ってなかったけど、今私が居るのはガラクタで出来た小高い山の上。
つまり私が二人を見下ろしているかたちになる。

「お前は！」

「遊奈！　どうしてお前が、ダークシグナーなんかに・・・！」

「どうして？　面白いことを言うのね、そんなの簡単じゃない・・・」

死んだのよ・・・。

言った瞬間、遊星の体から力が抜けた。
そのまま体をDホイールのハンドルに預ける。
まるで信じたくないとでも言うかのように。

「ふざけんな！　あの遊奈がそう簡単に死んでたまるかってんだ！」

「でもそれはあんたの感情しか根拠は無い。人間なんて脆く、儚い存在なの。あんたのようにありもしないことを思い込み、精神が打ちのめされないようにする・・・逆に遊星みたいに、信じたくないと耳を塞いだりしてる。これを見ても、あんたはただの人間である私が、巨大なガラクタに押しつぶされて生きていられると言うの？」

言い返せないのか、唇を噛み締め睨みつけてくるクロウ。
強がっていたって、どうせあんたじゃあ私には勝てないわ。
あんたのデッキと私のデッキでは考えているコンセプトが違うんだし。

「遊奈、教えてくれ。お前は・・・俺のせいで死んだのか？」
「さあ？　あんたが私を殺したかもしれないし、そもそも私は死んでいないかもしれない・・・というかそもそも私は遊奈を偽った別人かもしれないし、ただのお遊びで騙しているだけかもしれない」
「何が言いてぇんだよ、お前は！？」
「簡単なことじゃないの・・・ねぇ、デュエリスト？」

これでデュエル脳の遊星は簡単に釣れる。
今までの経験上で積んだことよ。

「なら、俺が勝てば、全てを教えてもらうぞ！」

ほら、乗ってきた。
それにしても、全てか。
なかなかに強欲じゃないの、遊星。

「好きにすればいいわ・・・私に勝てたなら、の話だけど」

言葉と同時、右腕を振りかざす。
現れるは紫とも青ともとれる炎で出来た巨人の地上絵。
それと同じものが空に浮かんでいる。

「なんだこりゃあ！」

「これは・・・一体・・・？」

二人の混乱を余所に、ヘルメットを被る。
そのまま横に停めてあったDホイール・・・スカイ・フライヤーに跨り、エンジンをかける。
その勢いのままエンジンを噴射させ、一気に遊星の元まで加速していく。

「さて遊星。ここまで来たのなら、もう余計なことは一切なしにしましょう？」

「ああ。俺もお前には聞きたいことが山ほどある」

「・・・随分と自分本位なのね、人殺しの癖に」

「ッッ！！」

とりあえず本人が気にしてるなら、それを活用しないなんて有り得ない。
デュエル前も、最中も精神攻撃ほど使えるものもない。
煽れば煽るほど、揺らせば揺らすほどに相手の集中力を削げる。
主観で言うなら、今の遊星は片翼の無いスターダストだ。
さして恐れるほどのことでもない。

「さてそろそろ始めましょうか、人殺(ゆうせい)しさん？」

「ッ！　あぁ・・・」

「「決闘(デュエル)！」」

遊奈
ＬＰ４０００
手札５
ｓｐｃ０

遊星
ＬＰ４０００
手札５
ｓｐｃ０

つい人殺しなんて言ったけど、これはいいわ。
あの苦しさや辛さ、罪悪感に歪む顔。
見てるだけでゾクゾクする。

すごくイジメテあげたい。
私の手で嬲って弄んで、そしてゆっくりとじわじわと私の手でイかせてみたい。

「俺の・・・「私のターン！」ッ！」

遊奈
手札５→６

よく悪役とかはやるけど、実際に割り込みなんてしたら気持ちいい。
あの遊星の驚きと悔しさで歪んだ顔なんて、それだけで興奮する。

「ＧＮ－赤ハロを守備表示で召喚」

遊奈
手札６→５
ＤＥＦ１００

今はこれで十分。
だってまだ始まったばかりなんだから。
前戯すらも、まだ早い。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

遊奈
手札５→４

「俺のターン、ドロー」

遊星
手札５→６
ｓｐｃ０→１

遊奈
ｓｐｃ０→１

「俺はスピード・ウォリアーを召喚！」

遊星
手札６→５
ＡＴＫ９００

過労死その１ね。
まあ遊星は気に入ってるみたいだし、序盤のアタッカーくらいには活躍するし・・・ああ、そういえばジャンク・シンクロンで蘇生できるわね。

「スピード・ウォリアーで攻撃！　そしてこの時、効果を発動する！　このカードは召喚されたターン、バトルフェイズ中は攻撃力が

２倍になる！」

ＡＴＫ９００→１８００

案外、これはこれでなかなかの効果だと思うけどね。
ま、所詮は２０００には届かないんだけど。

「ソニック・エッジ！」

無残にも蹴り飛ばされ、爆発するハロ。
だからといって特に感じることも無いが・・・。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

遊星
手札５→３

「私のターン、ドロー」

遊奈
手札４→５
ｓｐｃ１→２

遊星
ｓｐｃ1→2

さて、この手札でどうしようか・・・。
普通に倒せるだろうけど、伏せが二枚か。
結構微妙ね。
・・・通るかしらね、攻撃。

「遊奈！」

「・・・？」

「教えてくれ、ダークシグナーとは一体何なんだ！？　どうして・・・お前が」

「ダークシグナーとは、冥界より蘇りし破滅への導き手・・・現世への強い未練が、蘇る鍵となる」

「蘇る・・・だと・・・？」

まあ普通は意味不明よね。
だってどう見ても生きてるのに、それが蘇っているなんて言われちゃあさ。

でも・・・これが現実！

「驚くのは勝手だけど、進行はさせてもらうわよ」

「遊奈！　お前は未練とは、何なんだ！？」

「・・・私はＧＮ－連合国（フラッグ）の機兵を召喚！」

遊奈
手札５→４
ＡＴＫ１２００

これで終わりじゃない。
量産機だからね、フラッグは。
つまり数はある。

「フラッグの効果発動・・・自分フィールドにこのカードしか存在しない場合、デッキからもう１体のフラッグを特殊召喚できる・・・来なさい！」

ＡＴＫ１２００

これで一気に攻められる。
けれど、そう簡単には終わらせない。
ゆっくりと、じわじわといたぶり苦痛を感じたままイかせてあげるわ・・・遊星。

「１体目のフラッグで攻撃」

「リバースカード、オープン！　ガード・ブロック！　戦闘ダメージを０にして、カードを一枚ドローする！」

遊星
手札３→４

・・・随分と猪口才なことをしてくれる。
たとえそんなことをしても無駄だと、思い知らせてあげる。

「２体目のフラッグでダイレクトアタック」

「まだだ、リバースカード、くず鉄のかかし！　相手モンスター１体の攻撃を無効にし、再びセットする！」

無駄なことを・・・。
そんなことしたって、あんたの敗北・・・つまり死は確定なのよ・・・。

「・・・カードを二枚伏せ、ターンエンド」

遊奈
手札４→２

「俺のターン・・・ドロー！」

遊星
手札４→５
ｓｐｃ２→３

遊奈
ｓｐｃ２→３

ドローしたカードを見た時、遊星はふっと笑った。
その表情を見た瞬間、私の中でナニカがぶちっと切れたような音が聞こえた。

「・・・何が可笑しいの？」

「可笑しい？　俺は、お前とのデュエルを楽しんでいるだけだ」

「デュエルが楽しい？　敗者は死ぬだけの、この闇のデュエルが？」

「・・・敗者は、死ぬ？」

なんだ知らなかったのか。
そんなことも知らずに、この私とのデュエルを楽しんでいるなんてふざけたことを言っていたのか、こいつは。

「ふふふふふ、あはははははは！　どうしたの、その顔は！　私とのデュエルを楽しむんでしょう？　だったら、もっと笑いなさい

！　私はあんたを嗤ってあげるからさ！」

「ッッ！！」

その絶望に染まった顔が見たかったと、私の大半を奪った地縛神が昂り叫ぶ。
そんな哀しい顔は見たくないと、私の大半を奪われた私が泣き叫ぶ。
どうしようもない行き止まりに辿りつき、打ちひしがれた遊星は見ていて滑稽だ。
どうしようもない行き止まりに辿りつき、打ちひしがれた遊星を助けてあげたい。

「ははっ、続けなさい遊星！　プレイを続けないのならば、私のターンにするわよ！」

「・・・俺は・・・俺は、遊奈を・・・死なせたくない・・・二度も、あいつを・・・」

「・・・続行する気はないのね？」

遊星にプレイングを続行する気はないと判断した遊奈。
自分のターンへと進めようとしたその時だった。

『顔を上げろ、遊星！』

どこからか通信があった。
私のモニターには何も映っていない。
ならば、遊星号のモニターに映っているのだろう。
つい最近聞いた覚えのある声の主の顔が。

『お前は、遊奈の言葉一つで折れるような、脆い信念しか持っていないのか！？』

「鬼柳・・・だが、俺は・・・」

『思い出せ！　お前が誰よりも見ていた遊奈は、そんな奴だったのか！　遊星！』

『そうだ！　遊星、思い出せよ・・・お前は、遊奈から未来を託されていたんじゃないのか？！』

「・・・そうだったな、鬼柳、クロウ。俺は、俺自身を・・・それに何よりも遊奈を信じていなかった！」

そう言って、顔を上げた遊星の顔には・・・紛れもなくいつもの溢れるような自信が満ち満ちていた。
なるほど・・・そうでなければ、私の相手など務まらない。
そうでなければ・・・私の手でイかすに足る存在なんかじゃない！

「まだ俺は、立ち止まったりはしない！　俺はジャンク・シンクロンを召喚！」

遊星
手札５→４

あのカード・・・！
まさか、さっきのドローで引いていたの！？

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！　墓地のレベル２以下のモンスターを守備表示で特殊召喚する！　再び現れろ、スピード・ウォリアー！」

ＤＥＦ４００

レベルの合計は５。
つまり遊星のフェイバリット・モンスター。

「レベル２のスピード・ウォリアーに、レベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが背中のリコイルスターターを引っ張り、そのまま空中に飛ぶ。
その姿は消え、代わりに三つの輪が並ぶ。
そこにスピード・ウォリアーが飛び込む。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！　シンクロ召喚！　いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

ＡＴＫ２３００

口上を読み上げた瞬間、遊星のあった三つの輪の中心から光が迸る。そこから現れたのは、もはや何回見たかも思い出せないほど、その目に焼き付けたモンスターだ。

「あんたなら、そのままシンクロすると思っていたわ」

「どういうことだ・・・？」

「それを待っていたってことよ・・・リバースカード発動。負傷兵の突撃！　自分フィールドのＧＮと名のつくモンスターを１体除外し、相手のモンスター１体を２回目の相手のスタンバイフェイズまで除外する」

どこかぼろぼろになったフラッグが、ジャンク・ウォリアーの腰に組み付きそのまま真後ろに出来た異次元の穴まで突っ込んだ。

「くっ・・・俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

遊星
手札４→３

これで遊星の場は空いた。
ここから一気に攻めたいけど、あのかかしが厄介ね。
・・・猶予はまだもう1ターンあるし、ここは場を揃えようかしらね。

「私のターン、ドロー」

遊奈
手札2→3
spc3→4

遊星
spc3→4

「私はフラッグをリリースして、DT黄金の機翼兵(アルヴァアロン)を召喚」

遊奈
手札3→2
ATK0

これが私のダークチューナー。
そのレベルは－5。
・・・すこしの細工がいるけど、その分私のダークシンクロモンスターは出せば、その制圧力は凄まじい。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

遊奈
手札２→１

これで下準備は完了。
あとはレベル３のモンスターを引くだけ。

「俺のターン、ドロー！」

遊星
手札３→４
ｓｐｃ４→５

遊奈
ｓｐｃ４→５

「俺はマックス・ウォリアーを召喚！」

遊星
手札４→３
ＡＴＫ１８００

デメリットアタッカーか。

確か攻撃力上昇効果があったわね。
対策はあるのだけどもね。

「マックス・ウォリアーで攻撃！　そしてこのカードが相手モンスターに攻撃する時、攻撃力が４００ポイントアップする！　いけ、スイフト・ラッシュ！」

ＡＴＫ１８００→２２００

「リバース発動。和睦の使者。これでこのターン、私のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘でのダメージも０になる」

「くっ、ターンエンド」

ふふ、エンドしたわね？
ここから恐怖のダークシンクロが始まるのよ。
覚悟なさい？

「私のターン、ドロー」

遊奈
手札１→２
ｓｐｃ５→６

遊星
ｓｐｃ５→６

・・・来た。
これでほぼ場は私のものになった。

「私はＧＮ（ジンクス）－Ｘを召喚！」

遊奈
手札２→１
ＡＴＫ１４００

「さらにリバースオープン！　ブラック・ウェーブ！　自分のモンスターのレベルをその数値分マイナスにする！　私はＧＮ－Ｘのレベルを３から－３にする！」

３→－３

これで完了。
あとは・・・召喚させるのみ！

「レベル－３のＧＮ－Ｘにレベル－５のアルヴァアロンを、ダークチューニング！」

アルヴァアロンが翼を開き、そこから黒い星が五つＧＮ－Ｘに向けて飛んでいく。
それを三つの黒い星を出しながら受け入れる。

「黄金の輝きが、世界を埋め尽くす。今、我が手に覇道を！　ダークシンクロ！　黄金の巨砲機王（アルヴァトーレ）！！」

ＡＴＫ３０００

雲を引き裂き、天空より現れたのは黄金の巨体。
その大きさはスカイ・フライヤーの大体１２０倍・・・くらいかな？
でかすぎだな。

「でかい・・・」

「ふん、かかしがいてるせいで攻撃出来ないわね・・・私はこのままターンエンドよ」

「・・・こいつを倒せば、遊奈の下へ近づけるんだな？」

「倒したら、よ」

「いいだろう・・・ドロー！」

遊星
手札３→４

ｓｐｃ６→７
遊奈
ｓｐｃ６→７

「このスタンバイフェイズに、負傷兵の特攻の効果で除外されていたジャンク・ウォリアーは、俺のフィールドに戻る！」

ＡＴＫ２３００

「・・・だからどうしたの？　私の場にアルヴァトーレがいる限りは、あんたに勝機はほぼ無いわ」

「絶対と言わないところが、お前らしいな」

「知ったような口を利かないで、人殺し」

「ッッ！！」

その顔よ・・・もっとその痛みに耐える顔を見せて。
それこそが私の最高の餌となるのよ。

「・・・俺は手札から、Ｓｐ－ラピッド・ショットウィングを発動！　自分のスピードカウンターが五つ以上ある時、自分のモンスター１体の攻撃力は、エンドフェイズまで自分のスピードカウンター

の数×１００ポイントアップする！　俺はジャンク・ウォリアーを選択する！」

遊星
手札４→３
ＡＴＫ２３００→３０００

「攻撃力が並んだ、か・・・それで、次はどうするの？」

「・・・俺はこのターンで、決着をつける！」

「それは勇ましいわね・・・ただし、それが出来るのが確実でなければ、ただの無謀と言うのだけど？」

「秘策なら、ある！　ジャックから託された、この絆が証明する！　俺はＳｐ－オーバー・ブーストを発動！　スピード・カウンターを四つ増やす！」

遊星
手札３→２
ｓｐｃ７→１１

１０を超えた・・・まさか、ファイナル・アタック？

「スピードカウンターが１０以上あることで、俺はこのカードを発動できる・・・Ｓｐ－ファイナル・アタックを発動！　このターン

自分のモンスター1体の攻撃力は2倍になる！」

遊星
手札2→1
ＡＴＫ３０００→６０００
随分なインフレしたわね。
けれど・・・まだ甘い。

「ジャンク・ウォリアーで攻撃！　スクラップ・フィストォォオオ！」

「これはまずいわ・・・なんつってね、リバースカード発動！　暴走！」

「なっ！？」

「自分の機械族モンスターの攻撃力は2倍になる！」

ＡＴＫ３０００→６０００

「攻撃力が並んだ！？」

『だが、まだ遊星の場にはマックス・ウォリアーが残っている！』

京介・・・ダークシンクロを使っていたのに、彼らの恐ろしさを忘れちゃったのね？
この程度なわけがないのにさ。

「アルヴァトーレの効果発動！　このカードが戦闘を行う時、相手モンスターのレベル×２００ポイント攻撃力が上昇する！　ジャンク・ウォリアーのレベルは５・・・つまり１０００ポイントアップ！」

ＡＴＫ６０００→７０００

ふふ、これが今のマックスパワー！
はっきり言おう・・・今ならば、遊星になんて負けない、と！

「ぐぁぁあああ！！」

遊星
ＬＰ４０００→３０００
ｓｐｃ１１→１０

「あはは！　そのまま炎の中で焼きつきなさい！」

「くっ、うぉおおおおお！」

炎に触れるぎりぎりで持ち直した遊星。
しかし無駄だ。
どうせ次のターンには一気に攻めるのだから。

「はっ、はっ・・・ターンエンド。そしてエンドフェイズに、Ｓｐ
ーオーバー・ブーストの効果でスピードカウンターは１になる」

「あはは！　・・・もう終わりなの？　情けないわね。まだイかせ
足りないのに、ふらふらじゃない」

「遊奈・・・何がお前をそんなに駆り立てるんだ？」

「はぁ・・・それは私に勝てたらと言ってるでしょう？　ドロー！」

遊奈
手札１→２
ｓｐｃ７→８

遊星
ｓｐｃ１→２

攻めるとは言ったが、遊星の場にかかしが残っている以上は何も出
来ない。
・・・ならば、勝負は次のターンから。

「・・・一枚カードを伏せて、ターンエンド」

遊奈
手札２→１

「俺のターン、ドロー！」

遊星
手札１→２
ｓｐｃ２→３

遊奈
ｓｐｃ８→９

「スピードカウンターが二つ以上あることで、俺はＳｐ－エンジェル・バトンを発動する！」

遊星
手札２→１→３→２

「そして俺は、マックス・ウォリアーをリリースして、クイック・シンクロンを召喚！」

遊星
手札２→１

ＡＴＫ７００

「さらに自分フィールドにチューナーがいることで、墓地からボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

「合計は、７か！」

「クイック・シンクロンはシンクロ素材となる時、シンクロンと名のつくチューナーをシンクロ素材とするモンスターしかシンクロ召喚出来ない！　俺が選択するのは、ジャンク・シンクロン！」

７のジャンクといえば、厄介なあいつしかいない。
止める術も、ない！

「レベル２のボルト・ヘッジホッグにレベル５、クイック・シンクロンをチューニング！　集いし叫びが木霊の矢となり空を裂く！　光さす道となれ！　シンクロ召喚！　いでよ、ジャンク・アーチャー！」

ＡＴＫ２３００

「・・・面倒な奴め」

「ジャンク・アーチャーの効果を発動！　相手モンスター１体をエンドフェイズまで除外する！　ディメンション・シュート！」

「これで私の場はがら空きか。けど、あえて言うなら・・・それは悪手ね。アルヴァトーレの効果発動・・・このカードが相手のカードの効果によってフィールドを離れたとき、相手のモンスター1体を破壊する・・・私は、ジャンク・アーチャーを破壊する！」

「ぐっ・・・だが、まだマックス・ウォリアーが残っている！　行け！　スイフト・ラッシュ！」

遊奈
LP4000→2200
spc9→8

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「遊奈！」

「遊星ぇ・・・痛いよ・・・どうして、こんなことするの？」

「！！　俺は・・・」

『惑わされるな、遊星！　遊奈（そいつ）の顔をよく見ろ！』

「・・・！　笑って・・・いる・・・？」

あーぁ、ばれちゃった。
京介も京介で、随分つまらないことしてくれるじゃない。

せっかく精神的に虐めてあげようと思ったのに・・・。

「くくく、どうしたの？　もう終わり？　もっと私に痛みをちょうだいよ、遊星！」

「・・・カードを一枚セットし、ターンエンド」

遊星
手札１→０

「このエンドフェイズ！　私のアルヴァアロンが舞い戻る！」

ＡＴＫ３０００

「私のターン！　ドロー！」

遊奈
手札１→２
ｓｐｃ８→９

遊星
ｓｐｃ３→４

「ははっ、砕け散れ、マックス・ウォリアー！　ゴールド・バスターキャノン！　さらにモンスター効果で攻撃力は、８００ポイント上昇する！」

ＡＴＫ３０００→３８００

「リバースカード、くず鉄のかかし！」

「カウンター罠（トラップ）！　魔宮の賄賂！　魔法・罠の発動を無効にして破壊！　そして、遊星・・・私からのご褒美よ、一枚ドローなさい」

遊星
手札０→１

「微塵に消えろ！」

遊星
ＬＰ３０００→１０００
ｓｐｃ４→３

「うわぁぁぁぁぁ！！」

「あはぁ、いい声・・・もっと、もっとその悲鳴を聞かせてぇ！」

「はぁ・・・はぁ・・・」

「もう腰が砕けちゃってるの？　貧弱ね。ちょっと失望したわ・・・ターンエンド」

もっと楽しめるかと思ってたのに、結構期待外れだわ。
・・・でも次でまたひっくり返すから、遊星とのデュエルは楽しめそうなんだけどさ。

「くっ・・・俺の、ターン！」

遊星
手札1→2
spc3→4

遊奈
spc9→10

また、笑った。
キーカードを引いたのね。
そのドロー力・・・尊敬に値するわ。

「俺はハイパー・シンクロンを召喚」

遊星

手札２→１
ＡＴＫ１６００

「さらにリバースカード・オープン・・・ロスト・スター・ディセント！　墓地のジャンク・ウォリアーのレベルを一つ下げ、守備表示で特殊召喚！」

レベル５→４
ＤＥＦ１３００

「行くぞ、遊奈！　これが俺の・・・俺たちの絆の証だ！　レベル４のジャンク・ウォリアーにレベル４のハイパー・シンクロンをチューニング！　集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！　シンクロ召喚！　飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

ＡＴＫ２５００

来たか・・・シグナーの竜にして、遊星のエース。
これを打ち破ってこその・・・ダークシグナー。

「さらにシンクロ素材となったハイパー・シンクロンの効果で攻撃力は８００ポイント上昇する！」

ＡＴＫ２５００→３３００

攻撃力を超えた、か。
でも・・・まだモンスター効果での上昇が残っている。

「まだだ！　リバースカード、シンクロ・ストライク！　シンクロ召喚したモンスターの攻撃力は、シンクロ素材にしたモンスターの数×５００ポイントアップする！」

ＡＴＫ３３００→４３００

それでもまだ届かない。
・・・まさかあの手札が、最後の締め？

「このカードが、俺たちの絆を紡ぐ！　Ｓｐ－スピード・エナジーを発動！　自分のスピードカウンターが二つ以上ある時に発動できる！　自分のモンスター１体の攻撃力を、エンドフェイズまでスピードカウンターの数×２００ポイントアップする！」

ＡＴＫ４３００→５１００

とうとう、超えた！？
しかもあのカードは確か、私が遊星にあげたカード・・・！

「遊奈！　俺たちの絆が、お前の中の狂気を打ち砕く！　響け、シューティング・ソニック！」

「モンスター効果！　戦闘を行うモンスターのレベルの２００倍をアルヴァトーレに加える！」

ＡＴＫ３０００→４６００

まるで届いていない！

アルヴァトーレが、負けるですって！？

「はぁぁぁあああああ！」

遊奈ＬＰ２２００→１７００

「・・・でも、まだ終わりじゃないわ・・・アルヴァトーレが戦闘で破壊された時、黄金トークンを２体、守備表示で特殊召喚する」

ＤＥＦ５００

ＤＥＦ５００

ふふ、地縛神を呼ぶ準備は整った。

あとはこの手に呼び寄せるだけ。

「遊星・・・随分と粋がってるみたいだけど。あんたのＤホイール（それ）も、がたがた言ってるじゃないの・・・やっぱり闇のデュエルを舐

めてかかった報いなのよ」

「だがそれももうすぐ終わる！　俺が、お前を闇から救い出す！」

「出来るものならね・・・私のターン、ドロー」

遊奈
手札２→３
ｓｐｃ１０→１１

遊星
ｓｐｃ４→５

来ていないか・・・ならば、無理やり呼ぶまで。

「Ｓｐ－エンジェル・バトン発動！　二枚ドローし、一枚捨てる」

遊奈
手札３→２→４→３

「来ない・・・なら！　Ｓｐ－シフト・ダウン！　スピードカウンターを六つ取り除き、カードを二枚ドロー！」

遊奈
手札３→２→４

ｓｐｃ１１→５

・・・口端が釣りあがる。
右腕の巨人の痣が熱を持つ。
心が昂るのが、はっきりと感じられる。

「２体の黄金トークンをリリース！　深き闇の底より、地に縛られし大いなる邪神が蘇る！　降臨せよ、地縛神Ｃｃａｐｃｕ　Ａｐｕ！」

カードをどんよりと曇った空へと掲げる。
空へと光が突き進み、やがて雲を突き抜ける。
その晴れ間に、拳のような不気味な物体が現れた。

「な・・・あれ、は・・・」

「うふふふ！　あれこそが地縛神の心臓！　地縛神の核！　そして、私たちダークシグナーが求める生贄を集めるためのものよ！」

「地縛・・・神・・・」

私が懇切丁寧に説明をしていると、さらなる異変が起きた。
炎で描いた地上絵の周りにローブを着た人間が集まりだした。
おそらくはルドガーが用意したものとはこれのことだろう。

「彼らは一体・・・？　遊奈！　この人たちはなんのためにこんな所に！」

「あら？　分からないの？　生贄よ、生贄。地縛神を現界させるには多くの生贄が必要なの・・・あぁ、あんたたちシグナーは大丈夫よ？　あとそれ以外なら対戦相手なら、生贄にはされないけども・・・」

「そういうことじゃない！　そんなことをしてまで、お前たちは何がしたいんだ！」

やれやれ、熱くなっちゃってさ。
さっきがずっと言ってるのに。

「だーかーらー・・・それはデュエルに勝ったら教えてあげるって言ってんのよ！」

私の叫びに呼応してか、人々が球体のようになり、そのまま地縛神の心臓に吸い込まれていく。
一定量に達すれば、心臓が脈動を始めた。
無意識の内に私は自分の左胸に手を置いていた。
その脈動は、まさしくあの心臓の脈動と同じ動きをしていた。
今、私はそれを理解して、歓喜している。

「さあ・・・その姿を現しなさい！　コカパク・アプ！」

オォォォォンという妙な叫びのようものを発しながら、サテライトの大地から巨大な腕が生えた。
否、生えたのではない。
その腕はがっしりと地面を掴み、そして・・・地縛神の巨体が現れた。

「ふっ、ふふ・・・あはははははは!!　見なさい遊星!　これが私の神!　私に新たな命を与え、闇の使徒としての力をくれた神よ!　あはははは!」

「なんだ・・・このモンスターは・・・」

『まずい!　地縛神が来た以上、遊星の場のカードじゃ対応出来ない!』

『あ、おい、鬼柳!　どうすんだよ!?』

『どうって、こうすんだよ!』

ふん、今更何をやっても無駄よ。
これで一人目のシグナーは滅びた。

「地縛神で攻撃!」

「く、攻撃力ではこっちが上だ！　迎え撃て、スターダスト！」

遊星に向かって振り下ろされたコカパク・アプの右腕に突っ込むスターダスト。
しかしまるで何もなかったかのように、音もなく手応えもなくスターダストはすり抜けた。

「な！？」

「地縛神はぁ・・・ダイレクトアタックが出来るのよ！」

手のひらの下部が地面と接触する。
ごごごと音を立てながら、死へと誘う手が遊星に迫る。

「終わりよ！」

地縛神の手が触れるか否かというところで、突然遊星号がクラッシュし後方へと流れていった。
よくよく見れば、遊星号の前輪の一部が横一線に切れている。
そしてクラッシュしたところには、一枚のカードが。

「ブラッド・ヴォルス・・・ふん、京介ね」

デュエルが続行できる状態じゃないから、今回のは無効ってわけね。
へえ、京介も考えたじゃない。

割と後ろの方まで転がっていった遊星のもとまで近づく。
肉体的に大ダメージを受けたが、さらに精神的にダメージを与えるのもおつなものだ。
通ならば基本だろう。

「遊星・・・来(きた)る時が来れば、また痛めつけてあげる・・・その時までには、その甘い考えを直して、私にイかせられ、死のダンスを踊らされるのを心待ちにしてなさい、あはははは！！」

去るときに、遊星が私の名を呼んだのは気のせいだろう。
というか呼ばれたのは分かったけど、あえて無視した。
だってそっちの方が、精神的なダメージとなるじゃない。

今日のサテライトもまた、吐き気がするほど、変わっていなかった。
私が落ち着いていられるのが、余計に・・・ね。

八話『巨人の地上絵の痣を持つ女』（後書き）

遊奈「・・・・・・誰、あれ？」

あなたです。

遊奈「嘘よ！　だってあんな言葉使ったことないし、それに何あのテンション！？」

ダークシグナーになったんですから、キャラ崩壊してもいいと思いますよね？

遊奈「ならねーよ！　ていうか、ＧＮデッキならいつもの子らは？！」

やだなー。ダークシグナーになったのに、主人公サイドの彼らを使えると思ってるのですか？
頭おかしくないですか？

遊奈「酷い！？　・・・話を変えるけど、最後らへんの京介なんだけど・・・あれ、どっから投げたの？」

アニメを見るに・・・だいたい数百ｍくらいじゃない？

遊奈「えぇい、サティスファクションのリーダーは化け物か！？」

あ、あなたも練習すれば出来ますよ？

遊奈「やりたくない！」

では次回、第九話『予期せぬ事態　激突するイレギュラー！』
デュエル、スタンバイ！
遊奈「スルー！？　しかもイレギュラー！？」

そういえばディマクさん、またはぶっちゃった。
遊奈「あ、ジャックもだわ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9478x/

遊戯王５Ｄ’ｓ　転生者です、ごきげんよう

2011年11月23日15時51分発行